



記録 生協の  
つながる力  
2012

WEB 生協・東日本大震災被災地復興支援資料集 連動冊子

# 生協の「つながる力」で 被災地のこれからを 共に切り開く

2012年3月、東日本大震災発災直後から2012年1月までに行なわれた被災地生協および全国の生協の震災復興支援について記した資料集「記録・生協の『つながる力』」を発行しました。

本誌「記録・生協の『つながる力』2012」は、昨年度に引き続き、2012年度の震災復興支援(2013年1月時点)についてとりまとめたものです。

東日本大震災発災から2年がたとうとしています。

しかし、被災地の復旧・復興は、まだまだこれからという状況にあります。

被災地では、マスコミ報道の減少などから、「忘れられてきているのではないか」との声も強くなってきています。

本誌第I部では、被災地生協の役職員・組合員の、自ら被災しながらも全力で復興にあたった様子と、全国の生協の、被災地生協と気持ちを一つにしての支援についてあらためて振り返ります。

第II部では、2012年の、生協の「つながる力」の発揮の様子について記しました(注)。生協の事業を通し、あるいは生産者と共に、被災地復興への支援が継続されました。また、仮設住宅や県内外の避難先で暮らす方々へのサポートや、被災地の子どもたちを招く保養企画なども行なわれました。そして福島放射線との戦い……。人と人が協同し、その力でより良い暮らしを目指す組織、生協。その原点に立ち返り、「忘れない、風化させない」取り組みが数多く展開されています。

第III部では、被災地3生協の各専務理事から全国の生協へ向けての力強いメッセージをいただきました。そして、これからの被災地支援はどうあるべきかについて、レスキューストックヤードの栗田代表理事および同志社大学の上野谷教授より、示唆に富むご提言をいただきました。

2013年、被災地の人々と共に、これからの未来を切り開いていくための取り組みが、今までの経験を踏まえ、そして全国の生協の役職員・組合員の新たな知恵と工夫と思いを寄せ合いながら、始まっています。本誌が今後の震災復興支援にあたり、少しでもその一助になれば幸いです。

(注)

第II部の各生協の取り組みの詳細については、昨年度同様、日本生協連のウェブサイト「復興支援ポータルサイト」の「WEB 生協・東日本大震災被災地復興支援資料集」(「日生協 復興支援資料集」のキーワードまたはURL <<http://shinsai.jccu.coop/tsunagaru>>で検索)に掲載しています。(各章の各項目の最後のページに、主な情報のタイトルとサイト上の資料番号について記載しています。)



【表紙の写真】

「食のみやぎ復興ネットワーク」(みやぎ生協および各団体で構成)が「なたねプロジェクト」として菜種をまいたのが11年10月10日。その7カ月後の12年5月10日、一面に咲いた菜の花畑で「菜の花を見る会」が開催された。同プロジェクトは、被災した農地に、塩害に強い「なたね」を植え、収穫物(なたね油、農地に置いた巣箱からとれたはちみつ等)の販売収入などで被災した生産者を経済的に支え、同時に、農地の耕作放棄を防止する取り組みで、津波の被害で荒廃した農地が広がる地域に「菜の花の咲く風景」を作り、地域を励ますことも目的の一つだ。

数字で見る復興状況	2
-----------	---

## I 震災から復興へ～2011年を振り返る

<b>1.震災発生直後</b>	沿岸部と音信不通、孤軍奮闘する店舗	4
	「今何が必要なのか」個々が判断して行動	4
	大きな被害を受けるも商品供給を継続する	5
	茨城、栃木、千葉、長野でも大きな被害を受ける	5
<b>2.事業の復旧</b>	長期戦をにらんで店舗体制を立て直す	6
	11年4月11日から共同購入、個人宅配が再開	6
	避難所への宅配開始、離島の配達も再開	7
	ドライ・冷凍冷蔵とも物流機能が回復	7
<b>3.支援活動</b>	全国の生協から支援物資を送る	8
	組合員の協力で「炊き出し」「移動販売」	8
	被災地を1軒1軒回る「お見舞い活動」	9
	南相馬“市”開催	9
	生協職員を派遣し「仲間づくり」支援	9

## II 被災地への継続支援・2012年

<b>1.生協の事業を通じた復興</b>	震災1年、復興を祈念し、タオルを配布	10
	地産地消フェスタに2万人が来場	11
	被災地に寄り添うふるまい企画	11
	無料お買い物バスの運行開始	12
	買い物の不便を解消する生協の移動店舗	12
	日常の供給事業を通じた被災地支援の取り組み	13
<b>2.生産者と共に歩む</b>	生産者を支え共に進んで行く	15
	真崎わかめ「収穫を祝う会」	15
	組合員による桃のプロモーションを実施	16
	南三陸町志津川で生産者を支援	17
	種蒔きした秘伝豆を自分たちの手で収穫	17
	福島県の生産者を訪問、「絆ボックス」で応援	18
<b>3.心に寄り添う</b>	仮設住宅への支援「へちま絆プロジェクト」	20
	お菓子の提供と、夜のお茶っご会の開催	21
	被災地支援の今後を考えるボランティア担当者会議	21
	被災地の子どものための保養企画	22
	地域コミュニティ再生と、広域避難者支援	22
	「広島お好み焼き隊」が被災地に元気をお届け	23
<b>4.放射線と戦う</b>	福島を取り戻すための除染ボランティア	27
	福島県で仲間づくり支援	28
	福島県の子どもたちが放射性物質の測定を体験	28
	放射性物質摂取量調査「参加者のつどい」を開催	29
	2012年度の調査結果は検出件数と最大値が共に減少	29
	「被害の可視化」で風評被害を乗り越える	30
<b>5.災害への備え</b>	全国で進む災害への備え	31
	「大規模災害全国生協連携計画(全国生協BCP)」の策定	31

## III 今後の被災地支援を考える

<b>1.被災地生協からのメッセージ</b>	いわて生協 菊地 靖 専務理事	32
	みやぎ生協 宮本 弘 専務理事	34
	コープふくしま 野中俊吉 専務理事	36
<b>2.被災地支援のこれから</b>	インタビュー:レスキューストックヤード代表 栗田暢之氏	38
	インタビュー:同志社大学教授 上野谷加代子氏	40

# 数字で見る復興状況



2011年3月11日に発生した東日本大震災から2年が過ぎた今、被災地の復興はどれだけ進んでいるのだろうか。復興庁の出している復興状況のデータから、被災地の現状を見てみる。

## 被災地の方の心に寄り添う 長期的支援が今後必要

壊滅的な被害をもたらした東日本大震災から2年がたち、主なライフラインや公共サービス、交通網は復旧してきているが、その一方で、なかなか復興が進まない分野も多く存在していることが、復興庁のデータから分かる。

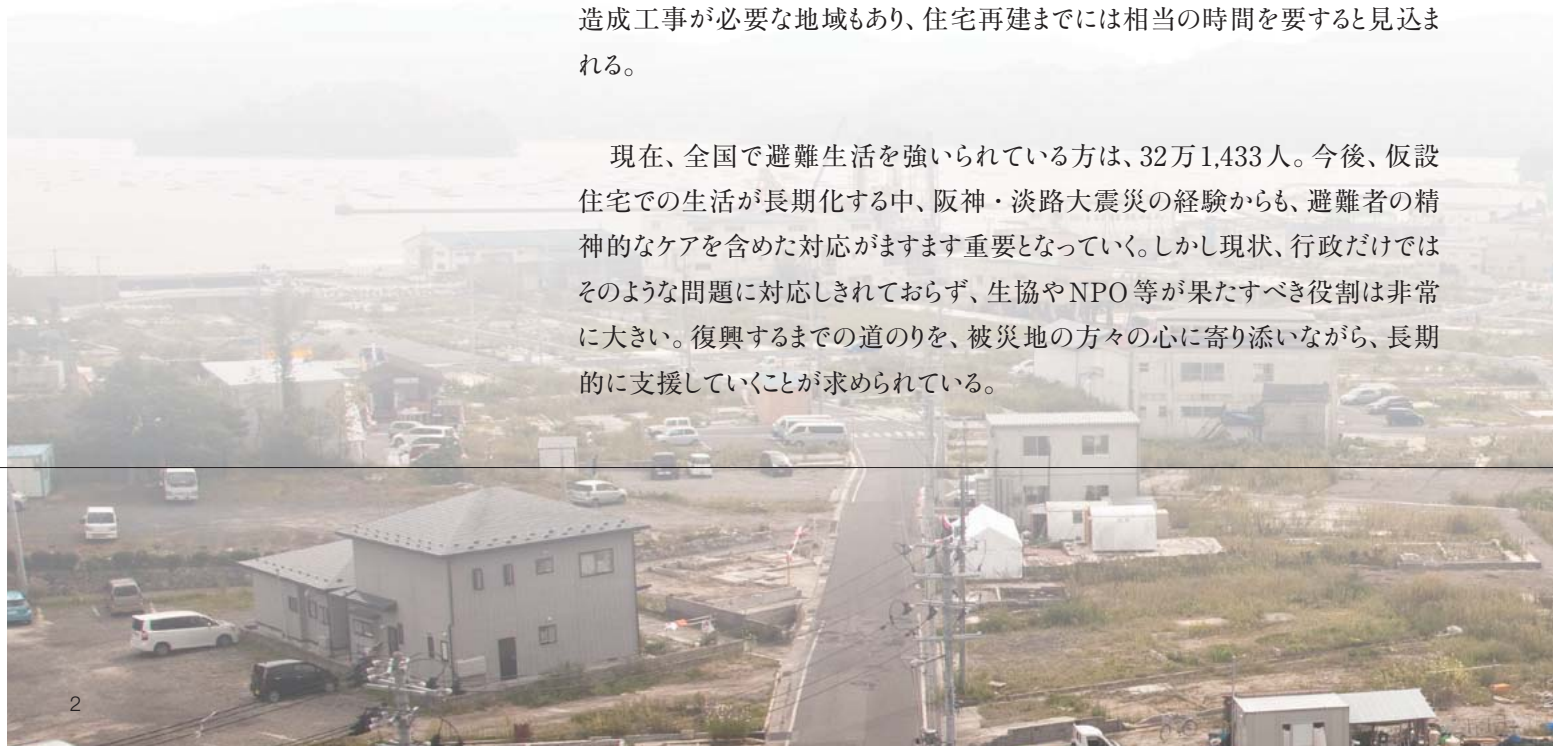
災害廃棄物の処理の進捗状況は34%（12年11月末現在）だ。政府は、13年3月までに災害廃棄物の59%を処理することを中間目標とし、14年3月までにすべて処理することを目標としている。しかし、廃棄物の受け入れ先などの問題もあり、工程は遅れ、難航している模様だ。また、福島県については、仮設焼却炉の設置等の処理体制が十分に進捗していないため、目標の設定自体も見合わせている。

農地については、2年たった今も、38%（12年9月末現在）の復興にとどまっている。14年度までに約9割の営農再開を目指し、さまざまな対策が進められている。水産業における漁港の復興は35%（12年10月末現在）だ。漁船や水産加工施設などの復旧作業が、今も懸命に続けられている。

まず災害廃棄物の処理が遅れ、まちづくりの復興にも時間が掛かっている。日々の生業となる、農業や水産業などの地域の産業の復興も、なかなか進んでいない。これらの数値から読み取れるのは、復興までには、まだまだ長い道のりがあるということだ。

まちづくりの進捗は、医療施設や学校等の復旧は進んでいるが、その他は時間が掛かっている。仮設住宅から出た人のための公営の住宅である復興住宅の着工は27%、家をつくるために土地に手を加える造成宅地の着工についてはわずか3%しか進んでいない。地盤沈下した土地をかさ上げするなど、大規模な造成工事が必要な地域もあり、住宅再建までには相当の時間を要すると見込まれる。

現在、全国で避難生活を強いられている方は、32万1,433人。今後、仮設住宅での生活が長期化する中、阪神・淡路大震災の経験からも、避難者の精神的なケアを含めた対応がますます重要となっていく。しかし現状、行政だけではそのような問題に対応しきれず、生協やNPO等が果たすべき役割は非常に大きい。復興するまでの道のりを、被災地の方々の心に寄り添いながら、長期的に支援していくことが求められている。



## 復興の進捗状況

### 避難者数 (2012年12月6日時点)

全体(人)	避難所にいる方(人)	住宅等にいる方(人)
321,433	159	305,048

### 仮設住宅等の入居状況

	入居者数(人)	入居戸数(戸)
公営住宅等	30,082	10,790
民間住宅	156,272	61,241
仮設住宅	112,330	48,310

0% 0% 100%

### 災害廃棄物(がれき)の処理



1,802万tのうち、約1/3が完了。  
14年3月末までに処理を終えることを目標にしている。  
12年11月末時点。

### 農地



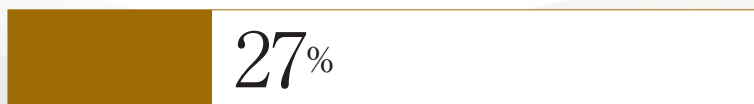
青森、岩手、宮城、福島、茨木、千葉県の津波被害を受けた農地面積は21,480ha(警戒区域含む)、うち営業再開が可能なのは8,190ha。12年9月末時点。

### 漁港



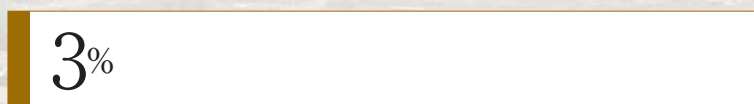
被災した漁港数は319漁港(警戒区域含む)、うち陸揚げ岸壁の機能が回復した漁港数は111漁港。12年10月末時点。

### 復興住宅 ※計画に対する着工数



各県が公表している必要災害公益住宅の数は約21,000戸、うち5,651戸に着工(用地確保時点)している。福島県分は全体計画未定のため除外。12年11月末時点。

### 復興まちづくり(被災した造成宅地) ※計画に対する着工数



復興交付金の配分可能額通知を受けた地区数253地区、うち工事に着手した地区数7地区。12年8月末時点。

出典：復興庁「復興の現状と取組 平成25年1月10日」より

# 震災から復興へ 2011年を振り返る

## 1 震災発生直後

2011年3月11日（金）、午後2時46分、マグニチュード9.0という観測史上最大の地震が東北地方を中心に襲い、太平洋沿岸に大津波を引き起こした。死者、行方不明者合わせ2万人に迫るかつてない大きな被害となった。通信手段を絶たれた被災地の生協の本部では必死に状況把握に務め、孤立した店舗や支部は独力で復旧を始めた。



岩手県上閉伊郡大槌町の被災直後の様子（2011年3月20日撮影）。

### 沿岸部と音信不通 孤軍奮闘する店舗

いわて生協



沿岸に近いスーパーが被害を受けたため、地域にとって数少ない頼れるスーパーとなったいわて生協・マリンコープDORA。

いわて生協本部を、長く激しい揺れが襲った。北棟の玄関が崩落、2階の天井が崩れる大きな被害があったが、幸い職員はいち早く外に避難したためケガはなかった。比較的損傷の少なかった東棟に対策本部を設置し、情報収集に乗り出したが、電話は通じず、停電でメールやテレビは使えない。電池式のラジオから得られ

る情報はごく限られたものだった。

本部のある滝沢村と隣の盛岡市内は、職員を直接店舗に向かわせて被害状況を把握。「Belf 青山」では天井や壁の一部が落ちるなどの被害を受けたものの、他店では大きな被害はないと分かった。音信不通の沿岸部へは、二人一組、計4チームを編成して向かわせた。しかし、道路が封鎖され、目的地にたどり着いたのは1チームだけだった。

このとき沿岸部の店舗、いわて生協・マリンコープDORAでは、震災発生時、店内で買い物をしていた約300人の組合員と職員を駐車場に避難させた。同店の



いわて生協・マリンコープDORAの店内には、地域の復興に向けたエールが至るところに貼り出された。

統括店長・菅原則夫さんは、その日100人ほどの組合員と共に、電気も水道も止まった真っ暗な店に泊まり、余震が続く中、何度も駐車場への避難を繰り返し、眠れない夜を過ごした。

翌日、寒空のもと、朝から食料を求める人々の長い列ができていた。宮古市中心部は津波による甚大な被害を受け、同店は食料を供給できる数少ないスーパーだった。職員たちは、売場からミネラルウォーターやすぐに食べられるものなどを運び、店の外で懸命に販売を続けた。

### 「今何が必要なのか」 個々が判断して行動

みやぎ生協

宮城県仙台市にあるみやぎ生協本部にも大きな被害がもたらされた。A棟とB棟では天井や壁が落下し、特にA棟は建物自体の損傷が大きく、後に取り壊されている。また、建物事態は無事だったD棟も、デスクや書棚が散乱し、天井の一部が剥がれるなどして立ち入りできな



みやぎ生協・国見ヶ丘店の職員が1対1でエスコートした。自分達も被災者であるにも関わらず、必死に商品を提供し続けた。



11年3月18日午前10時、前日の雪にかかわらず、みやぎ生協・国見ヶ丘店では、店を取り巻くように長い列ができた。

かった。

みやぎ生協は同じ敷地内にある文化施設「With」に急ぎ本部を移すと、そこに「震災対策本部」を立ち上げた。「今何が必要なのか」、それを個々の職員が判断して、仙台市内の店舗への調査や、避難してきた住民たちへの対応など、適切に動いていった。停電で真っ暗になった本部周辺地域では、発電機を備えた「With」が数少ない頼れる施設となり、地域住民が150人ほど避難した。

仙台市青葉区にある、みやぎ生協・国見ヶ丘店は、建物自体の損傷は少なかったが、激しい揺れのために商品が床に散乱し足の踏み場もなく、停電でレジも使えなかった。翌日は、開店前から長い列ができ、店の外にテントを張って販売を行なった。1週間ほどして店内の一部で営業が可能になった後も、入店する顧客は一度に数人に絞り、職員が1対1でエスコート。職員が売場に案内し、代金をその場でメモするなどの工夫で、精算時間を大幅に節約した。

## 大きな被害を受けるも 商品供給を継続する

### コープふくしま

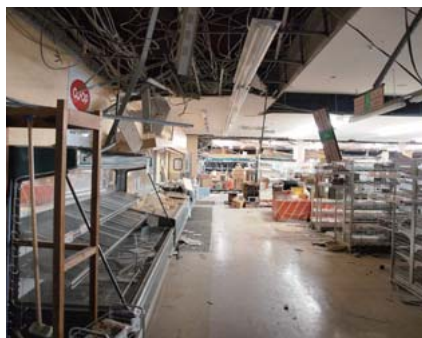
コープふくしまの11店舗は、福島市や伊達市など内陸に展開するため、津波の被害は免れた。だが、地震の損傷は大きく、特に伊達市のコープmart保原、福島市のコープmart笹谷、伊達郡国見町のコープmart国見の3店舗は天井が落ちるなどの被害を受けた。店内での販売ができない中、店へは食料を求めて人が長い列を作った。

レジは使えないため、レシートを打ち出せる大きな計算機を使った。販売をスムーズに行なうため、商品やその段ボールにはあらかじめ値段を大きく書き込んだ。また、一人でも多くの人に買ってもらえるよう、点数制限を設けるなど、混乱を避ける対策も施された。

自転車による来店も多かったため、荷台に乗せられる小さめの段ボール箱を



軒下の天井が落下したコープmart保原。コープふくしまで大きな被害を受けた店舗のひとつ。



店内の天井が落ち、配線がむき出しになったコープふくしまのコープmart国見。

用意した店もあった。各店は地域の事情に合わせて工夫を凝らし、店の前での販売を繰り広げていった。

## 茨城、栃木、千葉、長野でも 大きな被害を受ける

### いばらきコープ、とちぎコープ、 ちばコープ、コープながの



いばらきコープ・水戸店の様子。レジの上の天井が崩れ落ちた。

震災の被害を受けたのは、東北ばかりではない。茨城、栃木、千葉などの関東エリアおよび長野でも被害は大きかった。

ちばコープでは旭市の道路の地割れに配達中の配送車が巻き込まれ、浦安行徳センターでは、駐車場で液状化現象が発生した。

いばらきコープでは、水戸店やひたちなか店の天井が落ちるなどの被害を受けた。また、一部の宅配センターが建物に損傷を受け、15センター中9センターが停電・断水となった。

とちぎコープでは、越戸店、金井台店、矢板店が停電と建物の損傷を負った。

長野県は、11年3月12日に発生した長野県北部地震で栄村が震度6を記録し、住民1,700人以上が避難。コープながのは、災害協定を結ぶ栄村村役場から災害支援要請を受け、すぐに栄村避難所へ物資を搬入した。

また、千葉県印西市にあるコープネット印西冷凍センターは、震度6弱の揺れにより、商品の自動倉庫が壊れ、断水などで甚大な被害を受けた。

## 2 事業の復旧

被災地の生協職員や組合員は、自らも被災者でありながら、地域の支援活動を続けた。同時に、店や支部を立て直し、事業を復旧させることが何より求められた。店の前で販売をしていた店舗では、店内を復旧させ、通常の営業を目指した。津波の被害を受けた宅配事業の支部では、設備や機能の復旧が進められた。

### 長期戦をにらんで 店舗体制を立て直す

#### みやぎ生協

みやぎ生協では、宮城県内に展開する48店舗中、14店舗が大きな損害を負い、存続が危ぶまれた。11年3月11日、27店舗が店の前で販売、翌12日には44店舗が営業を再開した。

しかし、正規・パート職員など、自分たちも被災者であり、肉体的・精神的限界を超えてしまう、という判断から、24店舗の営業に絞り込み、10日間かけて各店でしっかり休める体制を整え、徐々に店を開けていった。

11年4月1日には37店舗の再開を果たし、午後9時までの営業を、11年5月1日には11店舗で午後10時まで、4店舗では午後11時までの営業とし、地域の人たちの生活に貢献した。

特に被害が大きかった店舗のうち、閉上店（名取市）、アトピア店（石巻市）の2店は、閉店せざるを得なかった。しかし、石巻渡波店（石巻市）は11年4月22日より店内の一部で営業を再開した（その後、店内修復作業を行ない、12年12月14日に新装オープンを果たした）。石巻大橋店（石巻市）は11年4月21日より店舗北側のプラットホーム前での販売を開始し、その



11年4月1日、みやぎ生協・明石台店（富谷町）では通常に近い営業再開へ。売場は、品揃えと彩りを取り戻した。

後、器具や器材を全面的に入れ替えるなどして、11年6月19日に店内での営業再開を果たした。

### 11年4月11日から共同購入 個人宅配が再開

#### いわて生協

いわて生協では、沿岸部の釜石支部（釜石市）、けせん支部（大船渡市）が津波の直撃を受けた。建物は残ったものの、水が入り込んで事務所は泥まみれになり、冷凍・冷蔵施設も機能しなくなった。これらの支部では、11年3月半ばから本部職員の応援も得て、いっせいに清掃を

行ない、設備も一新した。

11年3月28日から共同購入・個人宅配の商品案内と注文書が配布され、震災からちょうど1カ月後の11年4月11日から商品の配達が開通した。扱い品目は250アイテムほどで、通常の1,000アイテムほどに比べると、まだまだ復旧にはほど遠い状況だった。

だが、沿岸部の支部が再開時に直面したのは、組合員の激減という事態だった。亡くなった組合員、家をなくして避難所で生活する組合員が多かった。チラシを受け取ることができた組合員は震災以前の半分から3分の1に減り、職員たちはあ



「焼け野原を走る配送車を見て、うれしかった」と多くの組合員が話した。





共同購入の再開を、組合員はとても喜んでいた。

らためて被害の大きさにショックを受けた。

宮古支部は幸い津波の被害は免れたものの、市内の中心部や沿岸が大きな被害を受けた。

「とにかく被災地の方の話を聞こう。困っている方を最優先にしよう」と全員で被害の大きかった被災地を回り、組合員宅へうかがい、組合員の声を聴いた。

## 避難所への宅配開始、 離島の配達も再開

### みやぎ生協

みやぎ生協でも、沿岸部での個人宅配・共同購入再開時には、組合員の激減という事態に直面した。それを挽回すべく、11年4月半ばからみやぎ生協が始めたのが、避難所を対象にした共同購入だ。

みやぎ生協では、共同購入をより大型化した仕組みを、すでに幼稚園や保育園、福祉施設などで応用しており、その仕組みを避難所でも展開した。1カ所の避難所で数百人分の食材を届け、それを毎日の食事に使ってもらい、支払いは行政が行なう。気仙沼市、南三陸町など数カ所で実現し、弁当の配達につながったところもある。

これまで避難所では一律に物資が送り込まれていたが、震災からひと月も経てば、みんな選んでものを食べたくなる、そんな

ニーズに応えた支援だった。

11年5月3日には、離島の大島への商品供給を再開した。大島でも班をつくってもらい、フェリーで島に渡ってトラックで配達をする。震災後はフェリーは止まり、その間、巡視船で必要な商品を運

んで、島に住む人たちの暮らしを支えていたが、それも通常の形に戻りつつあった。

## ドライ・冷凍冷蔵とも 物流機能が回復

### コープ東北サンネット事業連合

店舗事業、宅配事業、いずれにも欠かせないのが商品の物流機能だが、今回の震災はここにも大きな被害をもたらした。

本来、東北でのドライ商品は、メーカーや卸から直接、日本生協連の物流専門会社シーエックスカーゴの仙台流通センター

(岩沼市)に入る。そこから店舗向けの商品は、コープ東北サンネット事業連合(以下、サンネット)の食品DC・菓子DC(岩沼市)で店別に仕分けされた後、各店舗に運ばれる。宅配向け商品は、共同購入ドライ統一センターに納品され、最終的には会員生協の各共同購入支部へ運ばれる。

東北地域のドライの物流を担っていた仙台流通センターは、自動倉庫に大きな被害を受けたため、埼玉県・桶川市の関東流通センターに機能を移した。サンネットの食品DCと菓子DCは、仙台市宮城野区の扇町にセンターを移転した。これによってドライの物流は、桶川の関東流通センターから扇町へのルートが新たにできた。

冷凍品のための設備は、岩沼センターに併設されていた日本生協連の東北冷凍在庫DCと、サンネットの冷凍食品DCの両方が津波で全滅したため、いずれも仙台市内に移転させ対処した。

本来のルートに比べて効率は落ち、コスト高になるが、東北への物流機能は回復していった。



埼玉県桶川市にあるシーエックスカーゴ本社／関東流通センター。

### 3 支援活動

津波で失われた建物は35万戸以上。被災者は避難所での不自由な生活を強いられた。また、家が無事だった人も、街の機能が失われ、ガソリン不足も相まって、何時間も歩いて買い物に行くなど不自由な生活を余儀なくされた。そんな人々を支えるため、被災地の生協と、全国から駆け付けた生協により支援活動は続いた。



シーエックスカーゴの支援物資輸送作業の様子。

#### 全国の生協から 支援物資を送る

全国の生協



支援物資の詰め込みが行なわれたシーエックスカーゴ桶川DC。

被災地の生協が奮闘する一方、震災直後から、全国の生協の支援が始まっていた。

日本生協連では、震災当日の夜、関連会社のシーエックスカーゴ桶川DCより、水、食料などの支援物資を積んだ大型トラック4台を出発させ、翌11年3月12日朝に仙台市内のみやぎ生協の富谷セットセンターに到着した。シーエックスカーゴは、支援物資発送のため、職員だけでなく、人手が必要だろうと駆け付けた退職した元職員、2011年度新卒新入社員も前倒し

で入社し、昼夜を問わず体制で作業にあたった。支援物資を少しでも早く、少しでも多く被災地へ届けたい一心だった。

阪神・淡路大震災を経験したコープこうべは、11年3月15日に宅配用トラック5台と小型タンクローリー車と共に、みやぎ生協の本部に入った。この時、みやぎ生協では、燃料不足が深刻化しつつあったため、大きな安心につながった。

その後、全国の生協から、人的、物的支援が続々と被災地に集まった。

#### 組合員の協力で 「炊き出し」「移動販売」

いわて生協

いわて生協は11年3月19日より、沿岸部での「移動販売」を開始した。移動は車が主体の沿岸部では、ガソリンが手に入らないため、買い物のため数時間歩くことも多かった。

宅配トラックは、カップ麺やインスタント食品、お菓子、水、乾電池、生理用品などを積み、滝沢村の本部を出発、2時間以上かけて沿岸部に到着する。現地の事情に詳しい組合員理事

と合流し、開催場所を決める。そこに長机とベニヤ板で台をつくり、その上に商品を陳列して売場にし、移動販売を実施した。11年4月1日までこの移動販売を沿岸部の120カ所で続け、のべ3,300人の利用を得た。

さらに、いわて生協では、「沿岸部の人たちのために何かをしなれば」という思いで、11年3月20日から避難所の炊き出しを開始した。前日、本部で材料の下ごしらえを行ない、当日早朝に食材と大釜、ガスボンベなど必要な器具一式を宅配のトラックに積み込んで、本部を出発し、沿岸部の避難所に向かった。

いわて生協の職員・組合員理事・こへぶ委員のほか、全国から駆け付けた生協の職員、組合員も合流し、大釜で豚汁など300食分を提供した。まだガスや水道の復旧が進んでいない中、避難所に住む人た



11年3月19日、釜石で行なわれたいわて生協の移動販売の様子。野菜、カップ麺、生活雑貨品などが供給された。



11年3月20日、大船渡市の大船渡地区公民館で開催された、最初の炊き出し。

だけでなく、近所の住人たちにもふるまわれた。

### 被災地を1軒1軒回る 「お見舞い活動」

#### みやぎ生協

被災地の生協の共同購入・個人宅配は、システムや物流施設が被害を受けたため、約2週間ほど休まざるを得なかった。その間、各支部で行なったのが、地域での「お見舞い活動」だ。みやぎ生協では、職員たちは水や非常食を携帯しながら、組合員宅を1軒1軒、訪ね歩いた。

「こんな時に本当によく来てくれたね。どうもありがとう」。そう言って思わず泣き出す組合員も数多くいた。「人の役に立てる生協に働いていてよかった」とみやぎ生協・東



担当者が手渡すお見舞い品を笑顔で受け取る組合員。



涙ながらに迎え入れてくれる組合員もいた。

支部の菅野貴志さんは実感したという。

津波の被害を受けた地域では、あったはずの家が流されていたり、住んでいた人が見つからなかったりすることが多かった。また、津波の被害を免れた地域も、震災後1～2週間は電気、水道などのライフラインが止まったままで、そこに住む人は買い物にも不自由し、大きな不安を抱えていた。「お見舞い活動」は、そんな人たちを勇気付ける取り組みとなった。

### 南相馬“市”開催

#### コープふくしま

震災で発生した東京電力福島第一原発の事故のため、11年3月末に原発30km圏内が自主避難区域と定められた。店舗は閉鎖され、4,000～5,000世帯が“買い物弱者化”する事態に陥った。

その状況を受け、コープふくしまは、11年4月2日、「負けないぞ!!南相馬市」の開催を決定。自主避難区域へ職員を送り込むことに議論はあったが、この取り組みのために、日本生協連をはじめ、全国の生協から続々と品物が集まった。

当日、コープふくしまの職員と組合員、支援のために福島入りした生協共立社、東海コープ事業連合、生協ひろしま、とくしま生協、こうち生協、コープおおい、日本生協連などの職員総勢50人が、トラック7台に分乗して朝7時半に出発、約2時間かけて現地に着した。売場を作り、野菜、カップ麺、レトルトカレーなどの加工食品、冷凍肉、豆腐、納豆などを並べ、価格はおつり不要の100円や200円に設定した。



“市”の会場には希少だった納豆や生鮮食品、コープふくしま自慢の豆腐などが並んだ。

朝早くから会場前には長い列ができ、午前11時に“市”をオープンさせると、会場には人がなだれ込み、ピーク時は入場2時間待ちとなった。会場では、震災後に初めて再開できた人たちが抱き合っって喜ぶ姿も見られた。午後3時の閉店までに640人が訪れ、売り上げは102万円に上った。

### 生協職員を派遣し 「仲間づくり」支援

#### 全国の生協



全国の生協職員が駆け付けて、各自2週間から最長2カ月の間、「仲間づくり」支援を行なった。

6月になると、被災地では避難所から仮設住宅への引っ越しが始まった。東北沿岸部には平地が少なく、仮設住宅を内陸の山奥に作るざるを得ない。津波で街の機能が失われ、さらに生活が不便になる。組合員激減という事態に直面したものの、地域はむしろ共同購入・個人宅配を必要としている。そこで全国の生協が協力して、被災地の支部に職員を送り込み、「仲間づくり」支援を執行することとなった。

日本生協連の呼び掛けに応じたのは全国28生協の95人の職員。11年6月から開始し、全国の職員たちは見知らぬ土地での組合員獲得に務めた。

支援者による「仲間づくり」は2カ月間実施され、いわて生協、みやぎ生協、コープふくしまの3生協合わせて2,073人の実績を挙げた。それぞれの生協でのキャンペーンの成果も加わり、合計3万1,122人の利用者拡大を実現することができた。

東日本大震災から1年。当面の生活は落ち着きを取り戻したものの、被災地ではまだまだ多くの支援を必要としている。

全国の生協と被災地生協は、東日本大震災を「忘れない、風化させない」ことを決意し、協力・連携しながら、2012年も継続支援を続けた。

## 1 生協の事業を通じた復興

事業体である生協にとって、供給事業を通して支援していくことは、最も重要なことの一つである。全国各地の生協では、店舗事業や宅配事業で震災復興支援の企画を立て、実施した。また、被災地企業への商品を軸にした支援活動や、従来から行っていた買い物弱者を作らないための買い物バス、移動店舗などの運行も被災地各地で取り組まれた。



2012年3月11日、被災地3県の生協では、全店舗でタオルが配布された。

### 震災1年、復興を祈念し タオルを配布

#### 被災地の生協

震災から1年を迎える2012年3月11日、コープ東北サンネット事業連合では、いわて生協・みやぎ生協・コープふくしまの全店舗の先着4万4,000人に、「復興祈念つなごろう! 東北の元気」タオルをプレゼントした。全国の各生協は、店舗や宅配で

の販売・配布、職員への配布、募金者へのプレゼントなど、さまざまな用途でタオルを活用した。また被災地のそれぞれの生協で独自の取り組みも行なわれた。

いわて生協では、震災から1年を迎え、12年3月8日から11日の4日間にわたり、「がんばろう! 岩手セール」を実施した。売場には、「復興応援商品」として地元の生産者やメーカーの商品が数多く並んだ。また、いわて生協の12店舗のうち9店舗では、被災した方々の手作品

体の協力の下、被災地域や応急仮設住宅周辺のみやぎ生協店舗10店舗で開催された。蛇田店(石巻市)では、サンヨー食品(株)がインスタントラーメンを、はごろも



みやぎ生協の蛇田店(石巻市)の前では、「被災地に寄り添うふるまい企画」として、熱々のラーメンがふるまわれた。



いわて生協のコープAterui(奥州市)では、組合員と職員のボランティアによって「復興応援商品コーナー」を開設。

や沿岸部の特産品を組合員・職員のボランティアが協力して販売する「復興応援商品コーナー」も開設された。

みやぎ生協では、「食のみやぎ復興ネットワーク」が主体となる「被災地に寄り添うふるまい企画」を実施。食品メーカーなど26団



コープふくしまのコープマート方木田店では、職員が交代制で、「原発撤廃の署名活動」を実施した。

フーズ(株)が缶詰のコーンとウズラの卵を、みやぎ生協がほうれん草とバターを提供し、野菜コーンラーメン300食をふるまった。

コープふくしまでは、全店舗で、おたのしみレシート番号くじ、まる得ポイント5倍サービスなどを実施。また、毎月11日を「いきいきコープ復興応援デー」と定め、売り上げの1%を、子育て応援や除染活動のために地域の市町村へ寄付。さらに、エントランスでは、原発撤廃などを訴える署名活動を展開し、みんなで取り組みたいという思いから、従業員が交替制で組合員に署名を呼び掛けた。

## 地産地消フェスタに 2万人が来場

### いわて生協

いわて生協では、12年5月19・20日に、いわて生協ベルフ牧野林で、「第3回復興支援いわて生協地産地消フェスタin牧野林(以下、地産地消フェスタ)」が開催された。会場には、近隣から約2万人の来場者が訪れ、賑わいを見せた。

今回で3回目となる「地産地消フェスタ」は、いわて生協と岩手県の共催で行なわれる、2年前から始まったイベントだ。「地元岩手の商品をみんなで利用して、岩手を元気にする」ことをテーマに、昨年、東日本大震災を経て、「復興支援」という新たな目的が加わることとなった。

今回は、出店に関する費用は主催者側がサポートし、さらにステージでのイベントなど、集客のための取り組みも増強。その甲斐もあり、「地産地消フェスタ」には、沿岸被災地域から出店した28の生産者・メーカーをはじめ、地元の多くの企業がブース出店した。

「被災した商店の出店数が昨年より増えているのがうれしいです。今回は、県の振興局も強力にサポートしてくれました。目指すものは同じなので、良い関係を築いて、今



フェスタ会場は多くの人で賑わった。



ステージでは宮古高校吹奏楽部が演奏を披露した。

後につなげていきたい」と、いわて生協常務理事の阿部慎二さんは、復興への意気込みを語った。

このほか、宮古高校の生徒による演奏や、チャリティーオークション、東日本大震災からの現状の写真展などを開催。さらに、いわて生協の産直アイコープ真崎わかめを生産している田老町漁協からは「お待たせしていた真崎わかめが12年5月1日によく収穫できました」とうれしい報告もたらされ、アイコープ産直真崎わかめ試食供給会も行なわれた。

## 被災地に寄り添う ふるまい企画

### みやぎ生協

12年6月9、10、12日の3日間、被災

地域や仮設住宅に隣接するみやぎ生協10店舗で、12年3月11日に続いて2回目となる「被災地に寄り添うふるまい企画(以降ふるまい企画)」を開催。メーカーや関連業者など36団体によって、試食や商品のプレゼント、料理のふるまいを行なった。

震災から1年が過ぎたが、多くの方々が復旧・復興に向けて懸命に努力している。そのような方々に寄り添い、元気づけ、復旧・復興に向けた手助けをすることができたらと考えたのがこの「ふるまい企画」だ。

蛇田店(石巻市)では、エスビー食品(株)がカレーを提供、(株)J-オイルミルズがオリーブオイルの小瓶をプレゼント、午後には、カルビー(株)のキャラクターが子どもたちにお菓子を配った。

この企画の主体となったみやぎ生協・食のみやぎ復興ネットワークの藤田孝さんは、「参加団体が、被災地を支援したいという思いから、呼び掛けに即座に応えてくれたことが大変うれしかったです。このつながりを生かし、これからも被災地に一緒に寄り添う機会をつくっていきたいです」と感謝していた。



いわて生協のお買い物バス。買い物客同士のコミュニケーションもすむ。

の運行は、13年3月末まで予定しており、13年4月以降の運行をどうするかは利用状況を見て判断する。

## 買い物の不便を解消する 生協の移動店舗

### 被災地生協

震災から月日がたつが、いまだに復興は道半ばにある。中でも、津波の被害を受けた沿岸部などでは、近くに店舗がほとんどないため、仮設住宅に暮らす人たちにとって、買い物の不便さは深刻な問題になっている。

いわて生協では、12年6月18日、宮古市に点在する仮設住宅17カ所（680戸）を2つのコースで巡る移動店舗「にこちゃん号」の運行を始めた。取り扱うアイテムは600点、そのうち6割が生鮮品となっている。また、「にこちゃん号」の駐車場所は、地域商業者の復興の妨げにならず、仮設住宅の方とその周辺にお住まいの方が交流しやすい場所を選定した。さらに、10月24日には2号車を釜石・大槌地域で、11月16日には3号車を陸前高田・大船渡地域でスタートした。いわて生協では、全国の生協に支援を呼び掛けながら、今後さらに台数を増やしていきたいと考えている。



お買い物バス利用者の買い物風景。店舗の規模に合わせ、滞在時間は、マリンコープDORAで70分、ベルフ西町で50分。

「仮設住宅にお住まいの方々と、その周辺でもともと暮らしていた方々との間で、ふれあう時間があまりないと聞いています。ならば、いわて生協が運行するバスで隣り合わせに座ったり、行き先の店舗で一緒に買い物をするような時間があつたりすると、コミュニケーションが深まるのではないかと考えました」と、いわて生協・常務理事の阿部慎二さんは話す。

山田町から店舗までバスに乗ると往復で1,500～1,600円かかるが、それが無料になるのは非常にうれしい、と利用者からは感謝の声が多い。「無料お買い物バス」

## 無料お買い物バスの 運行開始

### いわて生協

12年7月9日、いわて生協は沿岸被災地の住民と宮古市内の2店舗（マリンコープDORAとベルフ西町）を結ぶ「無料お買い物バス」の運行をスタートした。

移動店舗でも対応できない仮設住宅が数多くあり、無料で乗降できる「無料お買い物バス」を9コース設定し、宮古市・山田町の仮設住宅64カ所（2,078世帯）をカバーした。そのさい、復興途上にある店舗の経営を圧迫しないようしながら、仮設住宅だけでなく、その周辺に住む被災地住民も利用できるように配慮してコース設定している。



岩手県の仮設住宅での「にこちゃん号」。幼児からお年寄りまで、多くの人が列をなす。



明るい絵がペイントされたみやぎ生協のイベント車。  
 コープ商品などの試食もでき、被災された方のコミュニケーションの場にもなっている。

みやぎ生協では、移動店舗「せいきょう便」を、11年8月に1号車を、12年3月に2号車を導入。生鮮食品、加工食品、生活関連商品など約600アイテムを揃え、仮設住宅地域を中心に巡回している。

また12年3月には「イベント車」の2台目を導入。仮設住宅を巡回し、生協を知ってもらうために、コープ商品の試食など行っている。

コープふくしまでは、11年11月、移動販売車「せいきょう便」を開始し、福島市全域の仮設住宅と二本松市の一部地域を回っていたが、2012年7月には、国見町の一部仮設住宅への運行も加わっている。

また、とちぎコープでの各店舗で福島県からの避難されている方々向けの「情報コーナー」の設置や、福井県民生協の県内避難者への事業利用支援を実施(店舗1割引、宅配手数料無料など)の支援策も各生協で工夫を凝らしながら展開されている。

宅配事業でも、CO・OPとやま、パルシステム連合会、おかやまコープ、コープおおいたなどでは、宅配での対象商品の購入額の一部を支援金として寄付するなど、

日常の供給事業を通じての支援活動が取り組まれている。

岩手・宮城・福島の各県の生産品や原料を使用した商品の普及を進める取り組みも進められている。被災地生協から紹介・販売依頼があった商品をリスト化し、全国の生協はその中から供給する商品を選択する。その商品は、日本生協連の受発注・物流インフラなどの機能を活用し、全国の生協に届けられる。コープ九州では、全国に先駆けてこの仕組みを利用し、12年11月22日から25日の日程で、コープ九州内16店舗で販売を開始し、合計20種類の商品を供給した。



エフコープ新宿店の復興支援商品コーナーの様子。

## 日常の供給事業を通じた被災地支援の取り組み

### 全国の生協

生協共立社の「被災地支援げんき市」、コープあいちの「東北復興支援がんばろう岩手 絆フェア」、ならコープの「復興支援・お手伝いフェア」、コープこうべの「みやぎ生協絆フェア」など、全国各地の店舗で復興支援の取り組みが行なわれている。



12年11月30日にコープこうべ36店舗で行なわれた「みやぎ生協絆フェア」の様子。  
 仙台白菜を中心に、宮城県産野菜が供給された。

## 生協の事業を通じた復興

### 関連資料

※以下の資料は、こちらのサイトで。 [日生協 復興支援資料集](http://shinsai.jccu.coop) 検索 (URL://shinsai.jccu.coop/tsunagaru)

### 『CO・OPnavi』

◎資料番号2-2-1-201

震災から1年～2012年3月11日、被災店舗からの報告  
(被災地生協)

『CO・OPnavi』2012年5月・P24

◎資料番号2-2-1-202

つながれ! 生協の輪 復興支援ツールで全国が応援  
(全国の生協、日本生協連)

『CO・OPnavi』2012年6月・P24

◎資料番号2-2-1-203

「“移動店舗” が来てくれて、本当に助かっています」(被災地生協)

『CO・OPnavi』2012年11月・P24

◎資料番号2-2-1-204

生協のサービスを通じた復興へのお役立ち(みやぎ生協)

『CO・OPnavi』2013年1月・P24

### 『生協運営資料』

◎資料番号2-2-1-301

2011年度の店舗経営状況と事業復興に向けた店舗戦略  
(みやぎ生協)

『生協運営資料』2012年5月・P54

◎資料番号2-2-1-302

2011年度の店舗経営状況と事業復興に向けた店舗戦略  
(コープふくしま)

『生協運営資料』2012年7月・P59

◎資料番号2-2-1-303

同じ思いを持つ生協の仲間が力を合わせ取り組んだ、  
「東北の生協100店舗企画」

(コープ東北サンネット事業連合)

『生協運営資料』2012年7月・P99

◎資料番号2-2-1-304

2011年度の店舗経営状況と事業復興に向けた店舗戦略  
(いわて生協)

『生協運営資料』2012年9月・P59

### 『つながろうCO・OPアクション情報』

◎資料番号2-2-1-401

買い物が不便な皆さんのお役に立ちたい(パルシステムグループ)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第13号

◎資料番号2-2-1-403

商品の供給を増やし、支援をしたい(いわて生協)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第13号

◎資料番号2-2-1-405

地域一体となって、被災地の復興を(ならコープ)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第13号

◎資料番号2-2-1-406

2012.3.11(被災地生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第15号

◎資料番号2-2-1-407

つながろう!東北の元気タオル全国で活用(被災地生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第15号

◎資料番号2-2-1-410

みやぎ生協「せいぎょう便」・「イベント車」2台目導入(みやぎ生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第16号

◎資料番号2-2-1-411

「にこちゃん号」で笑顔を広げたい(いわて生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第18号

◎資料番号2-2-1-413

2万人が来場 いわて生協地産地消フェスタ(いわて生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第18号

◎資料番号2-2-1-415

車がないから助かります～無料お買い物バスの運行開始  
(いわて生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第20号

◎資料番号2-2-1-417

いわて生協:「にこちゃん号」3台目運行開始(いわて生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第23号

### 『つながろうCO・OPアクション情報』 復興支援ポータルサイト

◎資料番号2-2-1-501

第21回 いわて生協・移動店舗「にこちゃん号」出発

<http://shinsai.jccu.coop/contents/021/>

### 「つながろう CO・OPアクション くらし応援募金」

日本生協連からの募金の呼び掛けに多くの生協が応え、総計で2億9千5百万円の募金が集まっています。(募金開始時から2013年1月までの累計)

募金先	取り組み生協数	日本生協連への募金入金金額
仮設住宅への灯油支援※1	40生協	61,388,908円
福島の子ども保養プロジェクト※2	51生協	53,823,371円
学校図書館げんきプロジェクト※3	32生協	39,720,526円
あんしん福島募金※4	68生協	84,464,746円
指定なし	31生協	55,693,928円
合計	101生協	295,091,479円

※1 12年4月、受付終了。

※2 福島の子どもたちが放射線量の低い地域でのびのび過ごすためのプロジェクト。

※3 被害を受けた学校に図書を贈るプロジェクト。

※4 正式名称は、「安心して住める『福島』を取り戻すための募金」。放射線測定機器や被ばく検査装置を購入するために充てられる。



## 2 生産者と共に歩む

東京電力福島第一原発の事故による放射性物質の風評に悩まされる福島県の実産者や、津波による壊滅的な被害を受けた被災地沿岸部の生産者は、震災から時間が経過した今も、依然として支援が必要な状況にある。全国の実協や被災地実協は、継続支援を通して、生産者に寄り添いながら、共に復興への歩みを進めている。



内山さんが育てる麓山高原豚。放射性物質の測定検査をし、安心して食べてもらえる取り組みを実施。



今後の生産・供給に関して、お互いの思いを語り合う生産者の内山さん(左)とコープふくしまの根本さん(右)。

### 生産者を支え 共に進んで行く

#### コープふくしま

12年3月から、コープふくしまでは、福島県の生産者支援の取り組みとして麓山高原豚の取り扱いを開始した。毎月11日に開催する「いきいきコープ復興応援デー」では、麓山高原豚の生産者を顔写真入りでチラシや店頭ポップ広告で取り上げるなどして訴求。おいしいのはもちろん、放射性物質の測定の検査をクリアしているため安心して食べられることもあり、組合員の支持を集め、コープふくしまの豚肉供給高の3割を占めるまでに至っている。

福島県南部にある天栄村で麓山高原豚の生産を20年続けている内山福雄さ

んは、福島の実産者の気持ちを代表して語ってくれた。

「どんなに努力して、おいしいものを作っても、福島県産というだけで、なかなか食べてもらえません。放射性物質の検出がなくても、です。私たちの一番の励みは、おいしいって食べてもらえること。それが無くなった今、福島の実産者は、やる気を失いつつあります。それでも、私たちにできることは、安全管理をしながら、自信を持っておいしい食品を作り続けることです。その思いは、必ず消費者の方に伝わると信じています」

コープふくしま店舗部地産地消推進担当の根本茂さんは、「農業の復活がなければ、福島の復興はないと思っています。事業を通して生産者を支え、消費者と生

産者が互いに支え合いながら、全国へ福島の元気を発信したい」と話す。

### 真崎わかめ 「収穫を祝う会」 いわて実協

いわて実協が、1975年から販売してきた産直の「真崎わかめ」。その産地である田老町漁協(岩手県宮古市)は、東日本大震災による大津波で甚大な被害を受けた。963隻あった漁船のうち残ったのはわずか80隻足らず。わかめの養殖施設や加工工場をはじめ、魚市場や製氷工場、コンブ、アワビの養殖施設など、多くの漁業生産施設を失った。わかめ加工場の工場長や従業員数人が亡くなり、組合関係者全



「田老町漁協 収穫を祝う会」に参加した面々。(12年3月)

体では80人を超える犠牲者を出した。

震災以降、田老町漁協組合長の小林昭榮さんを筆頭に人材の確保を懸命に進め、「決してあきらめない」という強い気持ちを持つことで、養殖施設や加工施設を驚異的な早さで復興させた。

12年3月16日、わかめの収穫初日を迎え、地元経済の原動力となる漁業が動き始め、3月下旬から、いわて生協でついに販売が開始されることとなった。それを受けて、12年3月24日、「田老町漁協 収穫を祝う会」を開催した。

いわて生協理事長の飯塚明彦さんは、「宅配の注文受付開始1週間で2010年の売上高の半分を超え、組合員がいかに真崎わかめを心待ちにしていたかがうかがえます。このわかめの出荷は、復興に向けての大きな第一歩です」と話した。



組合員とそのお子さんが、わかめの選別作業を体験。

この会に参加したのは、漁協関係者26人と、いわて生協組合員・常勤者65人。組合員は、わかめのボイル加工場・パック工場を見学した後、田老町漁協本所にて、わかめの試食や料理を堪能し、「真崎わかめの歌」の合唱などで懇親を深めた。

小林組合長は「漁業再開が危ぶまれたこともありましたが、皆さんに支えられてやってこられました。いわて生協さんとの36年のお付き合いが田老町漁協組合員の誇りです。皆さんの真心が希望となり、前へ進む力になっています」と語った。



桃畑の前で、生産者の思いに耳を傾けるコープあいち、コープぎふ、コープみえの組合員。

## 組合員による 桃のプロモーションを実施 東海コープ事業連合

東海コープ事業連合では、12年3月から学習会などを重ね、福島県産の桃を取り扱うことに決めた。12年6月19日、コープあいち、コープぎふ、コープみえの組合員3人が、JA伊達みらい職員や生産者をインタビューし、機関紙等に掲載するレポートをまとめるために訪れた。

組合員たちは、JA伊達みらい管内の生産者が、極寒の真冬に除染作業する様子などを映像で見た後、実際に生産者の畑を見学した。生産者の斎藤栄慶さんは、「昨年、この地域で作られた桃に含まれる放射性物質の量は、国が定めた基準値を下回っていました。市場での取引価格は従来の半値でした。今年も同じ値段がつけば、多くの生産者が農業を断念する恐れがあります」と話した。

コープぎふの組

合員である山村まさこさんは、「この地域には、祖先から受け継いだ90年間の桃の生産技術の継承があるそうです。それが放射線の問題で止まってしまうことを、なんとしてでも阻止しようとする、生産者の皆さんの思いと努力に心打たれました」と語った。

生産者の努力を多くの人に伝え、安心を広げていきたいという思いを強くし、プロモーション活動を行なった結果、宅配(12年8月第1週、2週、5週の計3回)において、当初の供給計画では約6万5,000個の販売予定が、それを大幅に上回る約10万7,800個の注文があった。また、桃を買った組合員から生産者へ、「とてもおいしかった」、「除染作業、本当に大変でしたね」などの言葉が寄せられた。

<JA新ふくしま・JA伊達みらい>  
**あかつきミスピーチ・プレミアム・特秀**

※写真は商品番号0001 (5kg)です。

※いずれかの産地からお届けします。

※写真は商品番号0001 (5kg)です。

商品番号	0001	あかつき約5kg 15~18玉 ●お届けサイズ/31×47×11cm	5,300	※全日産地不明 無包装 円(送料・税込)
商品番号	0002	あかつき約3kg 9~10玉 ●お届けサイズ/40×29×10cm	4,200	※全日産地不明 無包装 円(送料・税込)

東海コープでは、2年連続で供給し、好評だった。

## 南三陸町志津川で 生産者を支援

コープしが、京都生協、  
大阪いずみ市民生協

宮城県内に産直産地を持っていなかったコープしがは、みやぎ生協の紹介で、宮城県漁協志津川支所の支援をすることになった。12年2月17日から20日まで、コープしがの「ボランティアバス南三陸町支援隊」が、宮城県南三陸町の、宮城県漁協志津川支所にて、カキの生産再開のためのイカダづくりを手伝った。作業で使う石が凍りつくほどの厳しい寒さの中で、ボランティアは黙々と作業を行なっていた。

参加した南草津センターの森下琢也さんは、「カキが商品になったら、心を込めたおすすみを組合員さんにできると思います。この経験を職場の仲間にも広めたいです」と話していた。

12年5月26日には、京都生協、大阪いずみ市民生協、そして鳥取県畜産農協によるボランティア隊が、合同で宮城県登米市の仮設住宅と南三陸町志津川の漁港で支援活動を実施した。

京都生協と大阪いずみ市民生協は、「被災地生協に代わって被災地生協の



強風や雪にも負けず、カキの生産再開の準備を手伝うコープしがの役職員。

産直先の支援を」という思いで、震災直後から継続支援を行なっている。南三陸町志津川でのボランティア活動は、京都生協は今回で6回目、大阪いずみ市民生協は4回目だ。今回の取り組みでは、炊き出しとカキ養殖用のイカダを固定するための土のうづくりを行なった。

登米市仮設住宅自治会長の宮川安正さんは、「自立に向けて、皆さんの支援は本当にありがたいです。仮設住宅では、350戸の皆が一つ屋根の下で暮らす家族だと思っています。志津川に帰れる

まで、皆で励まして頑張って生きていきたいです」と話した。

京都生協・商品政策室地産地消推進チーフの福永晋介さんは、「一人の力は小さいけれど、それが集まると大きくなる。生協として、そのつながりをつくり続けたい」



試験的に水揚げされたカキをむく生産者。

と支援への思いを語った。

## 種蒔きした秘伝豆を 自分たちの手で収穫

食のみやぎ復興ネットワーク

「村田の秘伝豆プロジェクト」は、2011年から食のみやぎ復興ネットワークが進めるプロジェクトのひとつで、秘伝豆という東北地方に伝わる青豆を育て、「地域農業の活性化」「休耕圃場の復活」「後継者が安心して農業に取り組めるための経済的支援」を目指している。「村田出荷組合」の10軒の農家と食品メーカー、市場関係者、みやぎ生協が、一緒に進めている。

12年5月19日、快晴の空のもと、みやぎ生協の組合員によって、柴田郡村田町菅生



炊き出しでは、仮設住宅にお住まいの方とたくさんのお話を交わした。



秘伝豆を手作業で収穫する風景。



収穫後には豆もぎをし、地元の人と話す機会が多くあった。

の畑で「秘伝豆」の種まきが行なわれた。最近、秘伝豆をつくる若い人が増えるなど、「秘伝豆プロジェクト」で生産農家の状況は確実に変わりつつあるという。

生産者によって除草や、栄養が行き届くようにする芯止め作業などが行なわれ、種まきから4カ月が過ぎた12年9月15日、畑には秘伝豆が立派に成長していた。

組合員たちは、自分たちで蒔いた種の成長に、顔をほころばせた。刈り方を教える高橋保さんも、「普段は機械で刈るんだけど、今日はぜひ皆さんの手で刈ってもらおうと思って、ちょうどいい具合に実るように育てたんだ」とうれしそうに話す。

収穫後は全員で豆もぎをし、もいだ枝豆は生産者のご家族の皆さんが、茹で

豆とずんだ餅に調理。味の濃い秘伝豆の美味しさに舌鼓を打ちながら、収穫を祝った。秘伝豆は12年9月20日より、みやぎ生協店頭でも、販売が開始された。

## 福島県の生産者を訪問、 「絆ボックス」で応援 コープ東北サンネット事業連合

12年9月15日、コープ東北サンネット事業連合(以下、サンネット)は、宅配事業で取引のある産直センターふくしまを訪問し、生産者と組合員が交流する産直収

穫体験ツアーを行なった。

2011年のツアーは、企画を検討していた時、東京電力福島第一原発事故による農作物への影響が盛んに報道されていた。開催があやぶまれる中、「今年もできることなら企画してほしい」との生産者の声によって実施を決定し、48人の組合員が集まった。そして4回目となる12年のツアーには、合計41人が参加した。

産直センターふくしま事務局長の服部崇さんは、「半分の顧客が離れてしまい、1年半経過しても状況は何も変わっていない。私たちにとって、サンネットの取り組みは数少ない希望です。来てくれたことに感謝しています」と話した。

サンネットでは、昨年から継続して12年も「福島県産 絆ボックス」を、平均して2カ月に1回のペースで供給しており、供給個数は約23万セット、供給高は1億5,000万円に上っている(10月4週現在)。

サンネット共同購入商品本部農産商務の遠藤敬さんは、「組合員さんは、『買って』応援する、生産者さんは、それに応え最高の果物・野菜を作る。われわれ職員も何とかして応援したいという気持ちがずっとあり、実施にいたりました」と話した。



生産者の思いを、直に聞く貴重な機会。



福島県産の農産物を詰め合わせた「絆ボックス」。

## 生産者と共に歩む

### 関連資料

※以下の資料は、こちらのサイトで。

日生協 復興支援資料集

検索

(URL://shinsai.jccu.coop/tsunagaru)

### 『CO・OP navi』

◎資料番号2-2-2-201

「田老町漁協を励ます会」を開催(いわて生協)  
『CO・OP navi』2012年1月・P23

◎資料番号2-2-2-202

あきらめずに、前を向いて進みたい  
～戦う福島生産者と、支える生協の取り組み  
(東海コープ・コープふくしま)  
『CO・OP navi』2012年10月・P24

### 『つなごろうCO・OPアクション情報』

◎資料番号2-2-2-401

厳寒と強風にも負けず、支援活動実施(コープしが)  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第14号

◎資料番号2-2-2-403

お待たせしました!真崎わかめが復活しました!(いわて生協)  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第16号

◎資料番号2-2-2-405

宮城を「食」で守る!「食のみやぎ復興ネットワーク」(みやぎ生協)  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第16号

◎資料番号2-2-2-407

フクシマフーズ(株)「いつも応援をありがとうございます」  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第16号

◎資料番号2-2-2-408

福島の豚生産者からのメッセージ～支え合い、共に進む  
(コープふくしま)  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第17号

◎資料番号2-2-2-410

八戸東洋(株)「ビデオレターに感激しました」  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第17号

◎資料番号2-2-2-411

「協同の力をあらためて感じることができました」  
(京都生協・大阪いずみ市民生協・鳥取県畜産農協)  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第18号

◎資料番号2-2-2-413

不二つくばフーズ(株)「味、品質の更なる向上に取り組めます」  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第18号

◎資料番号2-2-2-414

どんなに時間がかかっても元気な宮城をつくろう!  
(食のみやぎ復興ネットワーク)  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第19号

◎資料番号2-2-2-415

「農家として本当に感謝しています」  
～村田の秘伝豆プロジェクト(食のみやぎ復興ネットワーク)  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第19号

◎資料番号2-2-2-416

福島・桃生産者の努力と思い、私たちが伝えていく  
(東海コープ事業連合)  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第19号

◎資料番号2-2-2-418

今年も実施「福島の旬を味わおう!贈ろう」キャンペーン  
(地産地消ふくしまネット)  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第19号

◎資料番号2-2-2-419

種蒔きした秘伝豆を自分たちの手で収穫  
食のみやぎ復興ネットワーク「村田の秘伝豆プロジェクト」  
(食のみやぎ復興ネットワーク)  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第21号

◎資料番号2-2-2-420

「応援したいという気持ちが、注文数に表れました」  
(東海コープ事業連合)  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第21号

◎資料番号2-2-2-421

赤武酒造からのメッセージ  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第21号

◎資料番号2-2-2-422

組合員が福島産直産地を訪問 サンネット 産直収穫体験ツアー  
(コープ東北サンネット事業連合)  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第22号

◎資料番号2-2-2-424

「もっと販売してほしい」  
福島県産の「絆ボックス」で生産者を応援  
(コープ東北サンネット事業連合)  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第22号

◎資料番号2-2-2-426

宮城県漁協志津川支所に、ボランティア次々と  
みやぎ生協店舗でカキの供給開始(みやぎ生協)  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第23号

◎資料番号2-2-2-427

食のみやぎ復興ネットワーク開発商品続々  
11月開発商品、一部ご紹介!(食のみやぎ復興ネットワーク)  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第23号

◎資料番号2-2-2-428

酒造り再開 2年目を迎えて～赤武酒造からのメッセージ  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第24号

◎資料番号2-2-2-429

復興のシンボル仙台白菜が、大きく育ちました  
食のみやぎ復興ネットワーク「仙台白菜プロジェクト」収穫祭  
(食のみやぎ復興ネットワーク)  
『つなごろうCO・OPアクション情報』第24号

### 『つなごろうCO・OPアクション情報』 復興支援ポータルサイト

◎資料番号2-2-2-501

第25回 みやぎ生協・食のみやぎ復興ネットワーク  
「村田の秘伝豆プロジェクト」  
<http://shinsai.jccu.coop/contents/025/>

◎資料番号2-2-2-502

第19回 みやぎ生協・食のみやぎ復興ネットワーク  
<http://shinsai.jccu.coop/contents/019/>

### 3 心に寄り添う

復興までの道のりが長期化する様相を呈し、仮設住宅の暮らしが長引き、先行きの見えない状況が続いている。被災地では、住民の精神的なケアが大きなテーマとなっている。仮設住宅でのお茶会や、県外へ避難した方々へのサポート、被災地の子どもたちを招く保養企画など、全国の生協が、心に寄り添った被災地支援を行なっている。



悪天候にも関わらず、楽しそうに種植えをする参加者たち。

#### 仮設住宅への支援 「へちま絆プロジェクト」 コープこうべ、みやぎ生協

12年1月17日に、コープこうべがみやぎ生協の理事・役職員を神戸に招いて「1.17きずな交流会」を開催。ここで意見交換をした際、男性も参加しやすい園芸で、さまざまな使用用途が考えられるへちまを宮城で育ててはどうか、という意見が出され、「広げよう みやぎ生協支援の輪へちま絆プロジェクト」が始まった。

仮設住宅に引きこもりがちな住民同士の交流のきっかけとなり、さらに、仮設住宅

の夏の暑さを和らげる「へちま」のグリーンカーテンをつくる活動として、コープこうべから、栽培用プランターやネット、種などが送られた。種植え当日は雷雨にも関わらず、28人の参加者が、和やかな雰囲気の中で、種植え作業を進めた。このプロジェクトは、コープこうべ大阪北地区・第1地区・第2地区活動サポートセンターと、みやぎ生協県北ボランティアセンター（気仙沼市・南三陸町）が取り組んでいる。

12年11月5日から6日には、みやぎ生協の組合員と仮設住宅の住人計7人が、この夏行なわれた「へちま絆プロジェクト」の報告のためにコープこうべを訪問した。1

日目は阪神・淡路大震災の3年後に建てられた災害復興公営住宅（兵庫県・芦屋市）でシルバーハウジングにおける生活援助員（LSA）の緊急対応・安否確認等の活動を視察し、2日に交流会を行ない、育てたへちまで作った「へちま

タワシ」や「へちま観察記」がコープこうべに贈呈され、今後の支援のあり方について互いに活発な意見が出された。

みやぎ生協県北ボランティアセンター長の千葉淳子さんは、「へちまづくりを通じて、近所の方や組合員さんとも話が弾み、夫婦の会話も増えたとお話も聞いています。感謝の気持ちでいっぱいです。そのなかで、やはり、依然として孤立している方々への支援の課題は残っています。今後のサポート、橋渡し役は私たち生協の仕事と考えています」と話した。



兵庫県の交流会では活発な意見交換が行なわれた。



育てたへちまでつくった「へちまタワシ」と「へちま観察記」がコープこうべに贈呈された。

## お菓子の提供と、 夜のお茶っ会の開催 全国の生協

全国の生協や被災地生協では、仮設住宅でお茶会を開催したり、お茶会のお菓子などを提供したりすることで、仮設住宅の方々が集まれる場をサポートしてきた。

12年5月25日には、コープかがわの役員・組合員理事が岩手県を訪問。大槌町で開催されたふれあいサロン3カ所にお菓子とメッセージカードを届け、地域の方と一緒にスカーフづくりなどを行なった。参加者の1人は、「実際に被災地に行かなければ分からないことが多くありました。ふれあいサロンでお菓子が必要とされているということもその一つです」と話す。

この報告を受け、コープかがわでは、人びとがつながるきっかけとなるよう、お菓子500人分を5月より贈ることに決めた。この取り組みが伝わり、以降は四国4県で、毎月各県順番に500人分ずつお菓子を贈る取り組みへと広がった。



「〔夜のお茶っ会〕には、昼間には見かけない方もたくさんいらして、本当にうれしかったです」といわて生協監事・被災地支援担当の飯塚郁子さん。

12年6月30日には、コープかがわによって、岩手県の陸前高田市にある2カ所の仮設住宅で、「夜のお茶っ会」が開催された。これまでのお茶っ会は、昼間に開催され、女性の参加が多く、仕事をしている人は参加できなかった。今回の試みは、夜に開催し、お酒やおつまみなどを出し、男性も来やすい雰囲気をつくったかどうか、というアイデアによって実現した。



コープかがわの理事からプレゼントされた布草履をはいて、にっこり。

「夜のお茶っ会」の開始時間（18時）になると、続々と仮設住宅の居住者がやってきて、女性と子ども17人、男性8人の参加で、集会場はいっぱいになった。普段、お茶っ会で見かけることの少ない男性たちは、お酒を飲みながら、被災したときの様子や、今後の復興について話していた。

## 被災地支援の今後を考える ボランティア担当者会議 全国の生協

12年7月12日、全国の震災支援ボランティア担当者が集まる「第1回 震災支



「第1回震災支援ボランティア活動担当者交流会」ではそれぞれの生協の担当者が、思いを伝え合った。

援ボランティア活動担当者交流会」がコラッセ福島（福島市）にて開催され、それぞれの思い、アイデア、課題を共有した。集まったのは、全国の生協の震災支援ボランティア担当者など45人だ。

第1部では、現在のボランティアの現状報告や、被災3生協からの震災復興の進捗状況についての具体的な報告があった。

第2部では、3グループに分かれ、それぞれの生協の活動内容や課題を出し合った。あるグループでは、「被災された方との交流の場のスタッフは、同じメンバーが継続的に参加したほうがよいと聞きますが、費用や時間の面で難しい。どうしたらよいか?」という問い掛けに、被災地生協から、「同じ人でなくてもよい。遠くからわざわざ来てくださることがうれしい」という意見があったり、「皆がよく知るコープ商品が交流の場にあると、共通の話題になってよいのではないか」という意見が出たりした。また、「避難されてきた方が本音で話せる場所がない」といった課題も共有された。

「皆、同じような悩みを抱えていることが分かり、今後具体的にどのような取り組みをしていくか考えるヒントになりました」といった感想が参加者から出されるなど、実り多い交流会となった。



コープいしかわ本部の裏にある農園で行なわれた食育イベント「サタデーとうもろこし」に参加。生とうもろこしをガブリ!



コープみえでは、スイカ割りなど、親子共に参加できる企画も行なわれた。

## 被災地の子どものための 保養企画

### 全国の生協

岩手県陸前高田市への継続した復興支援ボランティア活動を行ってきたコープいしかわでは、12年7月27日から30日に、陸前高田市の児童を石川県内に招待する保養企画を実施した。陸前高田市の小学5・6年生の児童19人が、石川県の同学年の児童22人と楽しいひとときを過ごした。

「コープいしかわは、今年度もボランティアバスを運行していますが、今回の企画は、これまでの交流を次世代にまでつなげたいという思いがあります」と、組合員理事の奥迫敦子さんは企画意図につい

て語る。

7月27日に陸前高田市を出発した岩手県の子どもたちは、28日に石川県の子どもたちと初めて顔を合わせ、とうもろこしの収穫体験、昼食にはバーベキューを楽しみながら交流し、午後は和菓子づくり体験、金沢21世紀美術館の鑑賞などを行なった。

「みんなとはすぐ仲良くなれたので、金沢の良いところを陸前高田の友達に教えてあげたい」と話すのは、金沢市内から参加した竹本歩美さん。

12年7月29日から8月1日には、コープ

みえ主催の企画「福島の子どもたちと友達になろう」が、三重県鳥羽市の離島の一つ、<sup>とうしじま</sup>答志島で行なわれた。三重県の子どもたちと福島の子どもたちが初対面に関わらず楽しい時間を過ごし、砂浜ではお母さんたちがゲームや海水浴やりに熱中する子どもたちを横目に、日陰でのんびりしていた。「福島では、子どもたちが外で遊ぶことを含め、当たり前だったことがすべて当たり前でなくなっていました。『公園に行っちゃダメ』というのも辛いです。ここは何も心配いらないのでほっとしますね」とお母さんの一人は語った。

「海は2年ぶり。とっても楽しい」と笑顔の横山祐人くん。子どもたちは、初めて会ったとは思えないほど互いに打ち解け、笑い声が島中に広がった。

その他、全国の生協では、被災地の子どもたちのために、夏休み期間を中心に、さまざまな保養企画を実施した。

## 地域コミュニティー再生と、 広域避難者支援

### コープあいち

12年8月7日、コープあいちの組合員22人、職員11人は、岩手県陸前高田市で行なわれた「うごく七夕まつり」に参加した。



コープあいちの組合員も参加した「うごく七夕まつり」の様子。





避難された方が集まり、それぞれの持つ課題を皆で共有し、解決するきっかけとしている。(2012年9月、愛知県一宮市にて)

「うごく七夕まつり」は、巨大な山車が街を行き来する、江戸時代頃から続くといわれる由緒あるお祭り。準備には人手が必要だが、住民の多くが被災したため、担い手が足りない。そこで、コープあいちでは、準備段階から何度も現地に足を運び、祭りの運営に協力してきた。

コープあいち東日本被災地支援担当の岩本隆憲さんは、「山車の飾り付けや祭囃子の練習など、お祭りの準備には時間がかかり、また、それぞれの人に役割が与えられています。実はその準備の中にこそ、地域のつながりを深める大きな力があることに気付かされました」と話す。

陸前高田市が復興に向かうとき、地域コミュニティ再生に欠かすことができないお祭りを、途切れさせることなく継続することが重要だ。

東日本大震災によって、全国に多くの方が避難した。その数は、判明しているだけでも約32万人にのぼり、愛知県には、1,255人の方が避難している(2013年1月現在)。

現在、愛知県では、「愛知県被災者支援センター」を中心とし、多くの団体がそれぞれの力を出し合って、広域避難者を支えている。コープあいちも、県や市が、支援物資を届ける方法に苦慮していたときに協力を申し出たことが縁で、生協のノウハウを生かして物資を届けたり、被災された方から聞いた声を行政に報告したりす

る活動を行なっている。

コープあいちの参与、向井忍さんは、「避難者の側に立った支援をするためにも、各団体が普段からの情報共有をするなど連携し、担当者同士が顔でつながれる関係を構築しておくことが大切になるのではないのでしょうか」と話す。

## 「広島お好み焼き隊」が被災地に元気をお届け

### 生協ひろしま

12年10月7日から17日、生協ひろしまは、福島県、宮城県、岩手県の被災地3県に「広島お好み焼き隊」を派遣。事前にプロの講習を受けた、組合員・役職員計6人構成の3グループが各地を訪問し、熱々のお好み焼きをふるまった。

目の前で焼かれるお好み焼きに、福島県の仮設住宅に住む佐藤美喜子さんからは、「仮設住宅は狭くて匂いがこもるから、焼き物や揚げ物はあまりできないんです。住民全員が同じものを食べる機会も貴重です」との感謝の声。

これまで、生協ひろしまでは、募金や物

資・メッセージを届けるなどの取り組みをし、12年8月5日の「ピースナイター 2012」には、いわて生協、みやぎ生協、コープふくしまを通じ被災者24人を招待した。

「震災直後の11年3月17日に被災地に支援に入ったとき、『落ち着いたら、広島のお好み焼きを食べてもらいたい』とみんなで話していました。現地の生協の方も最大限協力してくれてうれしかったです」と事務局である生協ひろしま総合企画室の福島守さんは語る。

福島県での「お好み焼き隊」に参加した、生協ひろしま大野支所支所長の永井浩治さんは、「私たちは、避難生活に苦しんでいる方の声に、どう応えていけるかを考えるために来ました。被災地の実態を広島に戻ってたくさんの人たちに伝えたいです」と力を込めて語った。



コープふくしまの組合員理事たちも挑戦。生地の粉やソースはお多福グループ様からの提供。



生協ひろしまの30事業所が1枚ずつつくった「寄せ書きのれん」が、秋風になびく。

## 『CO・OPnavi』

◎資料番号2-2-3-201

避難されている方との絆をつくりたい  
コープ生活支援ボランティア“きずな”の取り組み  
(コープさっぽろ)

『CO・OPnavi』2012年4月・P26

◎資料番号2-2-3-202

震災から1年  
～2012年3月11日、被災店舗からの報告(被災地生協)

『CO・OPnavi』2012年5月・P24

◎資料番号2-2-3-203

「福島の子どもの保養プロジェクト」に広がる支援の輪  
(神奈川県生協連・茨城県生協連)

『CO・OPnavi』2012年7月・P24

◎資料番号2-2-3-204

旭市の仮設住宅でふれあいの場づくりをしよう(ちばコープ)

『CO・OPnavi』2012年9月・P24

◎資料番号2-2-3-205

多くの人の参加してほしい、「夜のお茶っこ会」岩手で開催  
(コープかながわ・コープとうきょう)

『CO・OPnavi』2012年9月・P26

◎資料番号2-2-3-206

生協のネットワークを生かした支援の取り組み  
南三陸町の子どもたちを京都に招待(京都生協)

『CO・OPnavi』2012年11月・P26

◎資料番号2-2-3-207

支援者にも目を向けることを忘れないで  
(TOMONY)

『CO・OPnavi』2012年12月・P26

## 『つなごろうCO・OPアクション情報』

◎資料番号2-2-3-401

コープふくしま・組合員の交流会開催(コープふくしま)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第12号

◎資料番号2-2-3-403

買い物に不便な皆さんのお役に立ちたい  
～パルシステム、仮設住宅での対面供給に協力～  
(パルシステムグループ)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第13号

◎資料番号2-2-3-404

「福島のお役立ち」に東北の生協が集結  
(コープ東北サンネット事業連合)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第13号

◎資料番号2-2-3-405

県外に避難された方との交流も実施  
～福島の子どもの保養プロジェクト・初の交流企画～  
(福島県生協連)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第14号

◎資料番号2-2-3-406

誰かのために、えんやこーら(いわて生協)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第13号

◎資料番号2-2-3-408

2,000枚の「ひなまつりカード」に思いをこめて(いわて生協)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第14号

◎資料番号2-2-3-409

みやぎに絵手紙を贈るプロジェクトが始動(コープこうべ)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第14号

◎資料番号2-2-3-410

復興への思いを歌にのせて(みやぎ生協)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第15号

◎資料番号2-2-3-412

いわて生協 バスボランティア再開!(いわて生協)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第16号

◎資料番号2-2-3-414

福島の子どもたち、神奈川県の子どもたちを満喫  
(神奈川県生協連、コープかながわ)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第16号

◎資料番号2-2-3-417

コープさっぽろ 生活支援ボランティア(コープさっぽろ)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第16号

◎資料番号2-2-3-418

絆コンサート開催(おかやまコープ)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第16号

◎資料番号2-2-3-419

菜の花に願いをこめて  
塩害を乗り越え、「なたねプロジェクト」商品化に期待(みやぎ生協)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第17号

◎資料番号2-2-3-420

茨城で、子ども保養プロジェクト実施  
(茨城県生協連・JA茨城県中央会・いばらきコープ・パルシステム茨城・茨城県畜連)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第17号

◎資料番号2-2-3-421

コープふくしま仮設住宅のお花見にシジミ汁を(コープふくしま)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第17号

◎資料番号2-2-3-422

顔が見えるつながりで支援を続けたい(コープこうべ・いわて生協)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第17号

◎資料番号2-2-3-423

ならコープ毎月10日「復興支援バザー」開催(ならコープ)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第17号

◎資料番号2-2-3-424

日本生協連 復興支援ボランティア隊結成(日本生協連)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第17号

◎資料番号2-2-3-425

コープみえ「メッセージカードをカレンダーにしてお届けします」  
(コープみえ)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第17号

◎資料番号2-2-3-426

いわてのサロンにお菓子1年分を贈呈(四国4生協)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第18号

◎資料番号2-2-3-428

「たまり場」へみんな「ころんしょ」!(コープふくしま・さいたまコープ)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第18号

◎資料番号2-2-3-430

被災地に寄り添う、ふるまい企画開催(みやぎ生協)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第18号

◎資料番号2-2-3-432

被災地のいまを伝えていく(みやぎ生協)

『つなごろうCO・OPアクション情報』第18号

◎資料番号2-2-3-433

人びとのつながりが新しい力を生む(コープあいち)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第18号

◎資料番号2-2-3-435

「夜のお茶っこ会」陸前高田で開催  
男性多数参加で大盛況(コープかながわ)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第19号

◎資料番号2-2-3-437

四国4生協がお菓子をきっかけにサロンで交流  
(いわて生協、四国4生協)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第19号

◎資料番号2-2-3-438

応援し続けたいという思いを胸に(鳥取県生協)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第19号

◎資料番号2-2-3-439

旭市の仮設住宅でふれあいの場づくりをしよう(ちばコープ)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第19号

◎資料番号2-2-3-440

被災地とつながり続けるために(全国の生協)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第19号

◎資料番号2-2-3-441

復興進めぬ南相馬市、求められるボランティア(日本生協連)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第19号

◎資料番号2-2-3-442

「学校図書館げんきプロジェクト」へ募金贈呈(日本生協連)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第19号

◎資料番号2-2-3-443

全国の生協キャラクター、福島に集合  
福島の子どもたちに元気と笑顔をプレゼント(全国の生協)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第20号

◎資料番号2-2-3-445

震災を乗り越える力をつけよう  
～みやぎの子どもたちに、「生きる力」を～(みやぎ生協)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第20号

◎資料番号2-2-3-447

子ども同士で生き生き交流(コープいしかわ・コープみえ)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第20号

◎資料番号2-2-3-450

地域コミュニティー再生に、生協の力を(コープあいち)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第20号

◎資料番号2-2-3-451

宅配のセンターで、復興夏祭り開催(みやぎ生協)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第20号

◎資料番号2-2-3-453

第1回バスボランティア開催(福井県民生協)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第20号

◎資料番号2-2-3-454

おまんじゅうを、みんなで作ろう(パルシステム埼玉)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第20号

◎資料番号2-2-3-455

日本一暑い町のお菓子をお贈りしました(コープぎふ)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第20号

◎資料番号2-2-3-456

福島の子どもたち、遊びにおいで!(全国の生協)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第20、21号

◎資料番号2-2-3-457

震災から1年半、被災地は今(被災地生協)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第21号

◎資料番号2-2-3-458

志津川と京都に虹をかけよう  
京都生協「海の虹プロジェクト」(京都生協)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第21号

◎資料番号2-2-3-460

地域間のネットワークで避難者を支えていく(コープあいち)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第21号

◎資料番号2-2-3-461

本場のお好み焼きと、元気をお届け  
生協ひろしまの「広島お好み焼き隊」が被災3県を訪問  
(生協ひろしま)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第22号

◎資料番号2-2-3-463

福島の子どもたちのためにできることは  
「福島の子ども保養プロジェクトシンポジウム」開催(日本生協連)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第22号

◎資料番号2-2-3-464

福島の復興は、始まったばかり  
茨城県生協連「バスボランティア」(茨城県生協連)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第22号

◎資料番号2-2-3-465

「支援する人が、一人で頑張ったらあかん」  
支援者のための支援センター「TOMONY」(TOMONY)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第22号

◎資料番号2-2-3-466

地域の健康をサポート  
株式会社コナミスポーツ&ライフとみやぎ生協で体操教室実施  
(みやぎ生協)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第22号

◎資料番号2-2-3-468

中学生たちの居場所に＜軽食支援＞を(山田町ゼンタハウス)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第22号

◎資料番号2-2-3-470

宮城県の福祉施設に、ウエストポーチを発注(エフコープ)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第22号

◎資料番号2-2-3-471

万が一にも備えることができます(コープふくしま)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第22号

◎資料番号2-2-3-472

遠くからも応援しています(コープかごしま)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第22号

◎資料番号2-2-3-473

二度と悲しい思いをしないように  
「桜ライン311」(津波到達ラインへの植樹)に、いわて生協職員参加  
(いわて生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第23号

◎資料番号2-2-3-474

共に地域を盛り上げよう!  
「宮古復興まつり」に、生協共立社・コープあいち・日本生協連が参加  
(生協共立社・コープあいち・日本生協連)

『つながろうCO・OPアクション情報』第23号

◎資料番号2-2-3-475

「へちまを通じて話が弾みました」  
みやぎ生協が「へちま絆プロジェクト」の成果をコープこうべに報告  
(みやぎ生協・コープこうべ)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第23号

◎資料番号2-2-3-476

被災された方々の自立支援にご協力ください  
みやぎ生協「手作り商品カタログ」を全国配布へ(みやぎ生協)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第23号

◎資料番号2-2-3-477

全国で商品を通じた復興支援を  
日本生協連のインフラを生かし、東北の商品を全国の生協へお届け  
(日本生協連・コープ九州)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第23号

◎資料番号2-2-3-478

福島の子どもたちを茨城に招待(いばらきコープ)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第23号

◎資料番号2-2-3-479

約300人が保養プロジェクトに参加  
東京ディズニーランド、キッザニア東京で保養プロジェクト開催  
(福島県生協連)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第23号

◎資料番号2-2-3-480

「すきまを埋めていく復興」が求められる  
コープあいちのツアーからみる、岩手県気仙地区の現状  
(コープあいち)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第23号

◎資料番号2-2-3-481

新しい年を迎える準備をお手伝い  
いわて生協バスボランティアで、仮設住宅の窓拭きを実施  
(いわて生協)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第24号

◎資料番号2-2-3-482

5,784枚のクリスマスカードをお届け  
沿岸部に住むいわて生協の組合員へお菓子を添えて  
(全国の生協)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第24号

◎資料番号2-2-3-483

今年も開催!京都でついた餅を宮城に届けよう  
京都生協「復興支援餅つき大会」開催(京都生協)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第24号

◎資料番号2-2-3-484

被災住民の声を受け止め、応え、伝えていく  
みやぎ生協の被災者懇談会に120人参加(みやぎ生協)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第24号

◎資料番号2-2-3-485

あったかく冬を過ごしてほしい  
コープあいづ、ちゃんちゃんこや使い捨てカイロを仮設住宅にお届け  
(コープあいづ)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第24号

◎資料番号2-2-3-486

被災地から遠い地で、何ができるか  
岡山で、震災支援交流会開催(西日本の生協、日本生協連)  
『つながろうCO・OPアクション情報』第24号

◎資料番号2-2-3-487

18カ国の協同組合で「災害時における役割」を確認  
神戸で、第7回アジア太平洋協同組合フォーラム開催  
『つながろうCO・OPアクション情報』第24号

◎資料番号2-2-3-488

2013年に向けてのメッセージ  
～被災地復興支援の取材で出会った皆さんから読者への伝言  
『つながろうCO・OPアクション情報』第24号

■『つながろうCO・OPアクション情報』  
復興支援ポータルサイト

◎資料番号2-2-3-501

第16回 いわて生協けんコープ「ふれあいサロンお茶っ子会」  
<http://shinsai.jccu.coop/contents/016/>

◎資料番号2-2-3-502

第18回 日本生協連「笑顔とどけ隊」  
<http://shinsai.jccu.coop/contents/018/>

◎資料番号2-2-3-503

第20回 いわて生協・矢作小学校の運動会で400食の炊き出し支援  
<http://shinsai.jccu.coop/contents/020/>

◎資料番号2-2-3-504

第23回 コープいしかわ陸前高田から19人の子どもたちを招待  
<http://shinsai.jccu.coop/contents/023/>

◎資料番号2-2-3-505

第24回 京都生協・海の虹プロジェクト  
<http://shinsai.jccu.coop/contents/024/>

## 4 放射線と戦う

東京電力福島第一原発の事故とともに放射線物質による汚染に見舞われた福島県では、食品の放射性物質の測定や汚染状況を把握するスクリーニングなど、風評被害を乗り越えるための懸命な努力が続いている。また、安心して暮らせる福島を取り戻すために除染作業をするなど、地域再生にも積極的に取り組んでいる。



空間占領を測るコープふくしまの菅原さん。放射線量の高い場所を探るには、地道な作業が必要となる。

### 福島を取り戻すための 除染ボランティア

#### コープふくしま

福島県全域に放射性物質汚染が広がり、多くの住民が避難を余儀なくされ、日々の生活の中で不安にさらされている。コープふくしま住宅部除染チームでは、2011年10月から10カ月間で、約70カ所の除染を行ってきた。

12年7月19日から26日には、福島県福島市にある大原総合病院エンゼル保育所で、コープふくしま住宅部除染チームによる除染作業が行われた。この保育所では、すでに行政による土の入れ替えなどの除染が行なわれているが、「さらに線量を下げること、保護者の皆さんが安心して子どもを預けられるようにしたい」との依



放射線量の高い場所は、研磨機で表面を削っていく。国際協同組合同盟（ICA）からの寄付で購入したという。

頼で、除染作業に取り組むことになった。

一度除染済みの場所の線量をさらに下げるのは難しいといわれている。しかし、除染チームリーダー・菅原一志さんは、「正しく、数多くの地点を測って、放射線量の高い場所を突き止めることが大切。それにより、除染の方法は明確になり、確実に線量は下げられます」と話す。

除染にあたっては、2種類の機器を使い、「空間線量率」と「表面汚染」を測る。ある地点の「空間線量率」が高い場合、次にその原因となる放射性物質はどこに多く付着しているのかを見極めるために、「表面汚染」を測定し、原因箇所を探るという手順だ。除染は、「測定→原因の推定→除去→測定」という地道な作業の繰り返し。この日も、除染作業によって、放射線量の値を確実に下げることが成功している。

福島県内における除染はまだ始まったばかりで、行政も手探りの中、コープふくしまは、これまでの経験の蓄積によって、除染作業を推進している。

「私たちの活動で直接除染できる範囲は限られていても、一つひとつ冷静に測定し、地域の皆さんと一緒に対策を考えることで、くらしの安心を取り戻していきたいと考



研磨機が使えない狭い場所は、手作業でコンクリートの表面を削る。



削った粉が飛散ないように、集塵機で吸い取りながら行なう。こちらは、ならコープの寄贈。

えています」（菅原さん）

「福島を取り戻す」という決意を胸に、今後も、コープふくしま住宅部除染チームの活動は続いていく。



サンネットによるコープふくしまの仲間づくり支援。毎日、仲間づくり担当者で成果を報告し合い、次の日の活動につなげる。

## 福島県で仲間づくり支援 コープ東北サンネット事業連合

福島県では、原発事故の影響で現在も断続的に人の移動が続いている。コープふくしまでは、発災後から県内の避難先で新たな生活を始めた方々に、生協としてお役に立てるようお声掛けを行ってきた。しかし、夏休みを機に、小さな子どもがいる家族などの県外移動が加速したことで、2011年の夏休み期間だけで宅配の利用者が約1,000人も減ってしまった。

そのような状況を受けて、12年2月5日から10日まで、コープ東北サンネット事業連合(以下、サンネット)に加盟するコープあおり・いわて生協・コープあきた・秋田県北生協・生協共立社・みやぎ生協は、コープふくしまに計22人の職員を送り、仲間づくり活動の支援を行なった。

東北の他県と福島県の震災被害の大きな違いは、原発事故の影響による放射性物質汚染の大きさだ。食品の汚染に対して敏感になっている地域住民とコミュニケーションをとるさいに、放射能に関する知識は不可欠。そこで、コープふくしまでは、仲間づくり支援スタッフが到着した12年2月5日「放射能学習会」を開催した。

コープふくしまの仲間づくりスタッフと仲間づくり支援スタッフの1週間にわたる懸命な取り組みの結果、計520人もの加入者を増やすことができた。コープふくしまの



夜遅い時間になっても、熱心に引き継ぎを行なう仲間づくり支援スタッフ。

仲間づくりスタッフの1週間あたり加入平均は通常200人程度だが、この週には317人の実績を残した。東北から集まった仲間づくり支援スタッフの存在が、コープふくしまのスタッフの大きな力や励みになったことが、この数字からも分かる。みやぎ生協(石巻)仲間づくりチーフの田松忠明さんは、「まだ大勢いる“困っている方々”に早く手を差し伸べたい、そして、同じサンネットの仲間であるコープふくしまさんに力添えしたいという気持ちで参りました。被災され

た方々のくらしはそのときで環境が変わる。だから、こまめに御用聞きのようにお邪魔し、お役に立てるタイミングを逃さない姿勢が大事です」と話す。

これからも仮設住宅から復興住宅への移行など、被災地での環境は刻一刻と変わっていく。その都度、困っている方々へ手を差し伸べることが求められる。

## 福島県の子どもたちが 放射性物質の測定を体験 日本生協連、コープふくしま

12年4月3日、コープふくしまの組合員の親子が日本生協連商品検査センター(埼玉県蕨市)を訪れ、食品に含まれる放射性物質の測定を見学・体験した。子どもたちは、さまざまな検査機械に触れたり、実際の検査を行なう職員の手元をじっと見たりと、興味津々の様子だった。今回、日本生協連商品検査センターを訪問した親子は、11年の11月から日本生協連が行なった「家庭の食事からの放射性物質摂取量調査」に協力した方々で、自分たちの提供した食事がどのように検査されたかを確認した。

日本生協連の「家庭の食事からの放射性物質摂取量調査」は、11年11月か



日本生協連の放射性物質の測定過程を見学する子どもたち。写真は、食べ物をミキサーにかけている様子。

ら12年4月にかけて行なわれ、各家庭の2日分の食事（6食分と間食）を1サンプルとしてすべて混合し、その中に含まれている放射性物質量を測定したもの。全国の250家庭（18都県、その内福島県内が100家庭）が協力した。

その検査結果は、検出限界（1Bq/kg）以上の放射性セシウムが検出されたのは、250家庭中4.4%。仮に、検出された食事を1年間毎日食べた場合、食事からの内部被ばく線量は、0.019mSvから0.136mSvと推定される。これは、国が設定した4月1日以降の「年間許容線量1mSv」の1.9%から13.6%にあたる。日本生協連では、今後も全国の生協・組合員と情報や課題を共有していく。



ほうれん草の放射性物質測定準備の様子。

## 放射性物質摂取量調査 「参加者のつどい」を開催 コープふくしま

12年5月25日、コープふくしまは、「家庭の食事からの放射性物質摂取量調査」の結果報告と12年度に実施する同調査参加者への説明会「参加者のつどい」を、コープmartいづみ店で行なった。

この説明会には、11年度の調査参加



放射性物質摂取量調査の参加者のつどいでは、納得いくまでさまざまな質疑応答が行なわれた。

者と12年度の参加予定者計16人、そしてコープふくしまの組合員理事も参加した。

コープふくしま常務理事の宍戸義広さんは、「漠然とした不安で県外に避難されている方々が、この取り組みや結果を知ることによって、少しでも安心して福島に戻って来られる一助になれば」と話す。

1回目の摂取量調査を受けた福島市内に住む参加者の一人は、「放射性物質に関して分からないことも多かったので、今日は納得できるまで調査結果について質問しました。生協で調査をして大丈夫ということでしたので、野菜をご近所に分けたり、孫にも安心して食べさせたりすることができます」と喜んでいました。

## 2012年度の調査結果は 検出件数と最大値が 共に減少 日本生協連

日本生協連では、12年5月28日から9月25日の期間、18都県334サンプル（内、福島県100サンプル）について、家庭の食事からの放射性物質摂取量調査を行なった。この調査は、食事に含まれるセシウム134、セシウム137の摂取量の実状把握



スクリーンを使いながら、放射線に関する基本的な知識も説明された。

と正しい理解を促進するため、昨年度に引き続き行なわれたものだ。実態をより詳細に見るために、昨年度の250サンプルから334サンプルへ増やし、東北、北関東を中心に実施世帯数を増やした。

結果は、検出限界（1Bq/kg）以上の放射性セシウムが検出されたのは3件（福島県2件、宮城県1件）。2011年度は250サンプル中11サンプル検出のため、検出件数は減少。なお、検出された最大値は3.2Bq/kgで、11年度調査の11.7Bq/kgから最大値も下がった。

この調査に昨年度から継続参加したのは127世帯だった。参加者からは、「前回に引き続き、2回目の摂取量調査をお願いします。前回の結果をみて、食品に対する心配はだいぶなくなり、普通に生

活できるようになってきました」との声があった。

## 「被害の可視化」で 風評被害を乗り越える

JA新ふくしま、福島大学、  
福島県生協連

12年9月24・25日、福島県生協連本部にて土壌スクリーニングプロジェクト「体験学習・意見交換会」が開催された。このプロジェクトは、JA新ふくしまと福島大学、福島県生協連が共同で行なう「放射性物質分布マップづくり」の調査活動だ。

放射性物質分布マップづくりとは、田んぼや畑1枚1枚の土壌の放射線量を測定し、結果を地図に落とし込んでいく作業。こ



正確なデータを得るため、一つの農地につき3カ所を測定。測定器の一部は、ならコープからの寄贈。

のようにして、「放射性物質分布マップづくり」を進めることで、原発事故の被害の状況が可視化され、「除染が必要なのか、農作物の栽培はできるのか、栽培するのに適しているものは何か、出荷前の検査はどこを重点的にすべきか」といった対策が見えてくる。

福島大学「うつくしまふくしま未来支援センター」産業復興支援担当マネージャーの小山良太さんは、「本来は国がやるべきことですが、このまま待ってでは福島の農業は立ち行きません。風評被害を乗り越えるために、生産者集団と消費者集団の直接的な結びつきによって行なう産消提携を進めるべき取り組みなのです。消費者が安心して生産者のつくる商品を購入できるよう、どこが汚染されているか、いないかをはっきりさせることが必要なのです」と放射性物質分布マップづくりの意義を話す。被害を可視化し、風評被害を乗り越えるために、現在、ボランティアを募集し、土壌スクリーニングプロジェクトを進めている。

## 放射線と戦う

### 関連資料

※以下の資料は、こちらのサイトで。 [日生協 復興支援資料集](#) 検索 (URL://shinsai.jccu.coop/tsunagaru)

### 『CO・OP navi』

◎資料番号2-2-4-201

放射性物質の除染を続ける生協のボランティア組織（コープふくしま）  
『CO・OP navi』2012年1月・P25

◎資料番号2-2-4-202

限界はつくらない、お役立ちのために全力で向き合う  
コープふくしまへの仲間づくり支援活動  
（コープ東北サンネット事業連合）  
『CO・OP navi』2012年6月・P15

◎資料番号2-2-4-203

「被害の可視化」で風評被害を乗り越える  
～土壌スクリーニングプロジェクト「放射性物質分布マップ作り」  
（コープふくしま）  
『CO・OP navi』2012年12月・P24

### 『つながろうCO・OPアクション情報』

◎資料番号2-2-4-401

除染活動推進の拠点オープン（コープふくしま）  
『つながろうCO・OPアクション情報』第12号

◎資料番号2-2-4-403

「福島のお役立ち」に東北の生協が集結  
（コープ東北サンネット事業連合）  
『つながろうCO・OPアクション情報』第13号

◎資料番号2-2-4-404

子どもたちが、放射性物質の測定を体験  
（コープふくしま、日本生協連）  
『つながろうCO・OPアクション情報』第16号

◎資料番号2-2-4-405

放射性物質摂取量調査  
参加者の「つどい」を開催（コープふくしま）  
『つながろうCO・OPアクション情報』第18号

◎資料番号2-2-4-406

「被害の可視化」で風評被害を乗り越える  
「土壌スクリーニングプロジェクト」ボランティア募集開始  
（コープふくしま）  
『つながろうCO・OPアクション情報』第22号

◎資料番号2-2-4-407

検出件数と最大値、ともに昨年度より減少  
「2012年度上期・家庭の食事からの放射性物質摂取量調査結果」報告  
（コープふくしま）  
『つながろうCO・OPアクション情報』第22号  
※詳しい調査結果や2011年度の調査結果は、  
「日本生協連 2012 摂取量調査」で検索。  
（URL：<http://jccu.coop/info/pressrelease/2012/10/2012-574.html>）

### 『つながろうCO・OPアクション情報』 復興支援ポータルサイト

◎資料番号2-2-4-501

第17回 コープふくしま「放射性物質検査の見学・実習・交流会」  
<http://shinsai.jccu.coop/contents/017/>

◎資料番号2-2-4-502

第22回 コープふくしま・住宅部除染チーム  
<http://shinsai.jccu.coop/contents/022/>



## 5 災害への備え

2011年3月11日に発生した東日本大震災に際し、生協は緊急物資支援やお見舞い活動に取り組んだ。日本生協連では、大規模な自然災害においても一層の社会的役割を發揮していけるよう、11年6月の第61回通常総会で、全国の生協で事業継続計画（BCP＝Business Continuity Plan）を策定することを提起。BCP検討会が立ち上がり、会員生協・事業連合、都道府県生協連を含め全国で検討・策定が進んでいる。

### 全国で進む災害の備え

東日本大震災の経験・教訓を生かし、全国の生協で、大規模災害へ備えた対策の構築が始まっている。

みやぎ生協・コープネット事業連合・コープ事業連合・大阪いずみ市民生協などでは、事業継続計画（BCP）が策定さ

れ、マニュアル検証訓練も始まっている。トヨタ生協・コープこうべでも2012年度内での策定完了の予定となっており、全国で策定が進められている。

また、都道府県生協連では行政との災害協定の見直しも始まっている。

日本生協連の中央地連・関西地連・中四国地連・九州地連の場でも、広域災害を想定した協議会や連絡会での学習や演習訓練、MCA無線の緊急連絡訓練が実施されており、あわせて生協ごとの図上演習や、地域における防災活動の人材育成のために「防災士」取得も推進されている。

### 「大規模災害全国生協連携計画(全国生協BCP)」の策定

上記の各地の動きとあわせ、全国の生協組合員・生協が地震や風水害等の大規模な自然災害で被災したときに、会員生協が協力し「生協事業の機能維持・継続」と「地域社会への支援(物的・人的

など幅広いもの)」を行なうための連携課題を定めた全国生協BCPの大枠が固まった（2013年度版の最終確定は13年3月）。

「全国生協BCP」は、年度ごとに見直しを行ない、会員生協の災害対策マニュアルとの連携を進めていく。あわせて「日本生協連災害対策マニュアル」にも反映する。

今回の「全国生協BCP」は、被災地生協対策本部、全国災害対策本部、被災地でない生協の3者の役割分担と連携ルールを、大規模災害の時系列に沿ってまとめられた。また、衛星携帯電話等による全国生協での緊急連絡網の整備や、震災直後の緊急支援物資の確定と被災地への自動送り込みの方法も決められた。

他にも、「先遣隊の役割の明確化」や被害状況などを全国各地で瞬時に把握することを目的とした「地図情報システムの導入」も組み込まれ、いざという時に備え、多角的な視点での準備が進められている。



首都直下地震を想定して行なわれた図上演習（主催：日本生協連・中央地連大規模災害対策協議会、12年8月4日）

## 1 被災地生協からのメッセージ

2011年3月11日の東日本大震災以来、被災地生協は、自らも被災者でありながらも、

復興に向けて、地域の支援に懸命に取り組んできた。

震災から2年を迎える今、被災地3生協の専務理事からメッセージをいただいた。



いわて生活協同組合  
菊地 靖 専務理事

### 復興は、 まさにこれからが正念場

大震災からまもなく2年が経過します。全国の生協の皆さまには、直後の混乱期からたくさんの支援をいただきました。厚く御礼申し上げます。2年目には、日本生協連や全国の生協・団体から支援金をいただき、移動店舗「にこちゃん号」を3台（宮古・釜石・大槌・大船渡・陸前高田）まで走らせ、まもなく4台目もスタートさせる予定です。この移動店舗は、どの地域でも名前通り“にこにこ”した笑顔で迎えられており、宮古地域での店舗の無料お買い物バスの運行、共同購入・個人宅配の広がりとおわせて、地域住民の生活に大きく役立っています。

被災地の復興は、2年という歳月がたってもまだまだ進んでいません。平地の少ない沿岸部では土地の確保に相当の時間を要します。また、もともと第一次産業中心、過疎化と高齢化が進むという問題を抱えた地域での大災害であり、復興は並大抵のことではありません。

しかし、2年が経過する中で、これまでのガレキ処理や堤防など土木工事の槌音だけではなく、地域住民の暮らし再建への息吹が響き始めたことも事実です。被災地でのニーズは刻々と変わります。今は、新たな一步を踏み出そうとする意欲や勇気に応えて、粘り強く応援する活動が強く求められています。もちろん一方で、高齢者や弱者へ手を差し伸べ、励まし続けることも忘れてはいけません。被災地では「忘れられてきたのでは」という危惧を強く持ち始めています。いわて生協は被災地の生協として、地域の生業の復活、もう一度つくり直さなければならないコミュニティーに、協同組合としての力を発揮していきたいと思えます。

これまでの全国の生協の皆さまの支援は、被災地にとって大きな励みになるものでした。また、いわて生協としても、全国の生協との絆を強く感じた2年間でした。被災地の産業、住宅や暮らし再建は、まさにこれからが正念場です。立ち上がろうとする地域の方々に寄り添い、励まし、復興への道のりを一緒に歩み続けて行くためにも、全国の生協の皆さまには引き続きご支援、ご協力をお願いいたします。



岩手県山田町に、2012年3月11日に設置された「鎮魂と希望の鐘」。今だ震災の爪あとが残る山田町に、犠牲者の鎮魂とこれからの復興を願う鐘の音が響く。

『つながろう CO・OPアクション情報』<sup>(注)</sup>でお伝えした、2012年度いわて生協の主な取り組み

1. 事業を通じた被災者支援の取り組み

お待たせしました!  
真崎わかめが復活しました!  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第16号



2万人が来場 いわて生協  
地産地消フェスタ  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第18号



いわて生協:「にこちゃん号」  
3台目運行開始  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第23号



2. 組合員活動・ボランティア活動での支援活動

いわて生協  
バスボランティア再開!  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第16号



「桜ライン 311」(津波到達  
ラインへの植樹)に、いわて生  
協職員参加  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第23号



新しい年を迎える準備を  
お手伝い  
バスボランティアで、  
仮設住宅の窓拭きを実施  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第24号



(注)『つながろう CO・OPアクション情報』の  
バックナンバーは、こちらのサイトで。



みやぎ生活協同組合  
宮本 弘 専務理事

## 3つの柱で 復興支援を推進

全国の生協、そして日本生協連の皆さんの心温まるご支援に感謝申し上げます。東日本大震災以来、一日も途切れることなく息長く支援を頂いていることに、生協の協同・連帯の素晴らしさを改めて強く感じております。本当にありがとうございます。

震災からまもなく2年が経過しようとしています。宮城県で亡くなられた方は1万384人、未だに行方不明の方が1,337人いらっしゃいます。住宅全壊は8万5,331棟、現在2万992戸の仮設住宅には、5万427人の皆さんが劣悪な環境で暮らしております。また、他県に避難されている方も8,000人を超えています。

復興は、まだまだ緒についたばかりです。住宅の整備は、1万5,000戸の災害公営住宅計画に対し、まだ2割の着手で、今年度完成予定はわずか300戸です。重要な産業の基盤である漁港の整備も半分の着手で、主要な魚市場での水揚げは震災前の4割までにしか戻っていません。

こうした中、みやぎ生協では、心のケア、地域産業復興、お買い物困難者へのサポートの3つの柱で復興支援をすすめてきました。

みやぎ生協ボランティアセンターでの「ふれあい喫茶」などの活動は、震災後868回、ボランティア7,673人、参加被災者4万,230人の活動になりました。

地域産業復興のため結成した「食のみやぎ復興ネットワーク」は、参加231団体、32のプロジェクトを実行しながら、地元の食材使った商品づくりや普及活動に広がりました。また、お買い物困難対応として移動販売車2台や買い物代行サービス「ふれあい便」を稼動しております。

東日本大震災では、全国の生協が被災地域のくらし・命の確保に全力をあげました。そして今も、全国の生協のさまざまな支援活動により、被災者・被災地の復興支援に大きな役割を果たしていただいております。

復旧・復興はまだこれからです。最後まで被災地の生協として、震災前以上に地域に生協の役割を発揮し続けていかなければなりません。

重ねてご支援に感謝するとともに、復興支援をみやぎ生協として全力で推進していくことを表明して、御礼にいたします。

2012年4月、宮城県女川町の女川高校のグラウンドに、仮設の「きぼうのかね商店街」がオープン。壊滅した商店街の店舗の大部分(50店舗)が入り、昔なじみの店が女川町に戻ってきた。



『つながろう CO・OPアクション情報』<sup>(注)</sup>でお伝えした、2012年度みやぎ生協の主な取り組み

1. 事業を通じた被災者支援の取り組み



「せいきょう便」・  
「イベント車」2台導入  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第16号



宮城を「食」で守る! 「食の  
みやぎ復興ネットワーク」  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第16号

震災を乗り越える力をつけよう  
～みやぎの子どもたちに、  
「生きる力」を～  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第20号



宅配のセンターで、復興夏祭り開催  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第20号



2. 組合員活動・ボランティア活動での支援活動

菜の花に願いをこめて  
塩害を乗り越え、  
「なたねプロジェクト」  
商品化に期待  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第17号



被災地に寄り添う、ふるまい  
企画開催  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第18号



被災された方々の  
自立支援にご協力を  
みやぎ生協  
「手作り商品カタログ」を  
全国配布へ  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第23号



被災住民の声を受け止め、  
応え、伝えていく  
みやぎ生協の被災者懇談会  
に120人参加  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第24号



(注)『つながろう CO・OPアクション情報』のバックナンバーは、こちらのサイトで。



生活協同組合コープふくしま  
野中俊吉 専務理事

## 事業を通した、 息の長い支援を

3.11の東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故から2年が経過し、今なお16万人が県内外で避難生活を強いられています。県立大野病院（原発から4キロメートルの距離）では避難途上で50人もの入院患者が死亡し、その遺族が2012年12月に損害賠償の裁判を起こしました。「原発事故の死亡者は一人もいない」などの暴言は放置できません。強制避難させられた県内8市町村の住民は放射線量の高さから我が家に戻る展望も持てぬまま、不慣れた地域の劣悪な仮設住宅で不自由な暮らしを続けています。

にも関わらず、原発事故の風化が進んでいる気がしてなりません。それは決して県外の方々の認識にとどまらず、福島県民の中にもそのような傾向があると感じています。“風化させない、させてはならない”そんな思いから、コープふくしまでは、さいたまコープやコープしずおか、そして全国の生協の皆さまの支援を受けながら、組合員さんを中心にして県内の仮設住宅を定期訪問し、避難生活者に寄りそう活動を続けてきました。一番つらい人たちに寄りそい続けるこのような活動は、すばらしいと思っています。

一方、福島県内の生協は共同で損害賠償請求の交渉もすすめて一定の成果を得たり、JAと共同で福島県の農産物を守る取り組みを進めて協同組合間の共同を発展させたり、全国各地の生協との太いパイプを築いたりも出ています。日本生協連と各地の生協の全面的協力で継続できている“食事に含まれる放射性物質測定”では、参加した組合員本人の安心を得るのみならず、そのデータが安心につながるとして、福島県の多くの自治体から感謝され頼りにされています。

収束しない原発事故、ここからの復興のためにコープふくしまとして持てる力を引き続き発揮したいと考えています。そのためにも、事業経営を消費増税にも耐えられるように組み立てることが、決定的に重要だと自覚しています。

これまで全国の支援のおかげでさまざまな活動を重ねることができました。引き続き全国のご支援無しには福島県の復興は不可能だと思います。ただ、支援くださる皆さまも持ち出しだけの支援では長続きは難しいとも思います。可能であるならば各生協の事業に組み込むかたちで福島県産品を扱っていただく等のご支援を、息長くお願いしたいと考えています。



福島県には、学校や公園などにリアルタイム線量測定システムが2,700台（福島市には368台）あり、憩いの場である公園や、人々が行きかう駅前などに置かれている。

『つながろう CO・OPアクション情報』<sup>(注)</sup>でお伝えした、2012年度コープふくしまの主な取り組み

1. 事業を通じた被災者支援の取り組み



福島の豚生産者からの  
メッセージ  
～支え合い、共に進む  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第17号

放射性物質摂取量調査  
参加者の「つどい」を開催  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第18号



2. 組合員活動・ボランティア活動での支援活動

コープふくしま 仮設住宅の  
お花見にシジミ汁を  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第17号



万が一にも備えることができます  
～タンクローリー購入  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第22号



「たまり場」へ  
みんな「こらんしょ」！  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第18号



「被害の可視化」で  
風評被害を乗り越える  
「土壌スクリーニングプロジェクト」  
ボランティア募集開始  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第22号



検出件数と最大値、  
ともに昨年度より減少  
「2012年度上期・家庭の食事  
からの放射性物質摂取量調査」  
『つながろうCO・OPアクション情報』  
第22号



(注)『つながろう CO・OPアクション情報』の  
バックナンバーは、こちらのサイトで。

## 2 これからの被災地支援

東日本大震災からの復旧・復興は、まだまだ緒についたばかりだ。

これからの被災地支援はどうあるべきか？

特定非営利活動法人レスキューストックヤード代表理事の栗田暢之氏と同志社大学社会学部社会福祉学科教授の上野谷加代子氏のお2人にお聞きした。



特定非営利活動法人  
レスキューストックヤード代表理事  
**栗田暢之氏**

### ネットワークで ボランティアを支援

私たちレスキューストックヤード (RSY) は、阪神・淡路大震災での支援活動を通じ、人も、モノも、できればお金も「救援=レスキュー」のために「蓄える=ストック」「場所=ヤード」が必要だという構想のもとに発足、2002年にNPO法人化して12年に10周年を迎えました。

「ボランティア元年」といわれた阪神・淡路大震災から18年。当時は何のノウハウもなく、手探りで走ってきました。今では災害が起こればボランティア団体が動くのは当たり前ですが、かつてはそんなことはありませんでした。

日本は、震災だけではなく、風水害や火山の噴火など、自然災害がとて多い国です。私たちは阪神・淡路大震災後もさまざまな災害での支援を通じて蓄積したノウハウを生かし、被災地の皆さんとつながる活動を続けています。

そして、東日本大震災の発災直後には、私も代表世話人の一人となって東日本大震災支援全国ネットワーク (Japan Civil Network、以下JCN) を発足させました。JCNは、東日本大震災における被災者・避難者への支援活動に携わるNPO、NGO、企業、財団、社団などの諸団体による災害支援のための全国規模のネットワーク組織です。

私たちが国民の使命は、  
絶望する人を  
絶対に出さないことです

13年1月19日現在で、世話団体である日本生協連をはじめ、全国各地の生協を含む817団体が参加しています。

本来であれば、震災復興は地元が主体となって行なわなければなりません。しかし、今回の東日本大震災では、多くの方が亡くなり、とても地元だけではコーディネートすることはできませんでした。阪神・淡路大震災の経験上、ボランティア団体の集約、情報交換の場づくりなど、早急な連絡調整の場が必要だと分かっていたので、それができる組織が必要だと判断したのです。

しかしながら、JCN設立当初は、参加団体が発信する情報が連日大量に飛び交い、肝心の現地の受け手は、それを見ている時間も人も不足していたため、十分には活用されませんでした。そ





ここで情報を専門に扱う人が必要だと分かり、今は、コーディネーターを被災3県に一人ずつ置き、情報を共有しながら活動をしています。

しかし、現在、JCNに登録している団体でも、その半数が活動を止めています。これは大きな問題です。その主な原因は、人材不足、資金不足、ノウハウ不足であり、それを埋めていくにはネットワークの力が必要です。

## 法の整備と最低限の権利保障を求めるためのムーブメントを

現地での復興支援の課題に取り組むことはもちろんですが、全国にいる広域避難者の問題も絶対に忘れてはいけません。復興庁によると、2013年1月25日現在、自県外に避難している「県外避難者」は、福島から5万7,377人、宮城から8,035人、岩手から1,637人に上っています。さらに被災3県以外でも福島県境やホットスポットと呼ばれるよ

うな地域の方々が避難を余儀なくされています。そういった方々には、支援の手がまったく行き届いていません。また、「なぜ、避難してきたのか」という目で見られ、つらい思いをしている人が多いです。こういった方々に対して、それぞれの地域行政の支援体制はばらばらです。また、広域避難者を支援する団体は、現在分かっているところで約350団体ありますが、それら団体は非常に脆弱な体制で、今後継続して取り組むことが難しい団体も多くあります。そこは税金でカバーして当然と考えます。

阪神・淡路大震災の際は、「被災者生活再建支援法」\*が議員立法でできました。税金を個人に投入することはご法度だったのですが、コープこうべが声をあげ全国生協で取り組み、結果約2,400万人の署名を集めて法が成立しました。

まさに今、困っている広域避難者や被災者の方に対して、法の整備と最低限の権利保障を求めるためのムーブメントが必要です。そういった意味でも、日

本生協連の役割は大きいと思います。この国の次の姿を模索するためにも、国に要求すべきことはちゃんと要求していかなければいけない時期に来ています。もちろんこれは生協だけでなく、JCNやNPOなどの各団体が垣根を越えて一致団結し要求していかなければいけません。

私たち国民の使命は、絶望する人を絶対に出さないことです。広域避難者、現地での被災者を、やはり身近な人がしっかりと支えていかなければいけない。身近というのは、心が身近だということです。阪神・淡路大震災のとき、名古屋から支援に入った学生たちは、今でも92歳のおばあちゃんとなつなかりがあります。そういった18年後にも続くようなつなかりを、東日本大震災の被災者と全国の人が持つてほしいと強く願っています。

震災の風化は顕著です。声を出せない人、弱い人がいつも取り残されます。一人の絶望者も出さないために、ボランティアはまだ必要です。そして、ボランティアと同時に、被災された方にも役割が必要です。互いに役割を持って活動を続けていくことがポイントになってくると思います。

\* 阪神・淡路大震災をきっかけに成立。自然災害により住家が全壊した世帯に対し、生活必需品や引越費用として最高100万円が支給される。また、2004年3月には法の一部が改正され、被災家屋のガレキ撤去費用や住宅ローン利子等として最高200万円が支給される「居住安定支援制度」が創設された。

# 今こそ、 「民協働」を 進めよう



同志社大学 社会学部  
社会福祉学科 教授

## 上野谷加代子氏

### くらしは「協同」で 成り立つ

生協は、東日本大震災の直後から刻々と変わる被災地のニーズに対して、非常にうまく対応したと思います。避難所へのさまざまな物資の支援や、仮設住宅でのサロン活動などを積極的に行なっていますし、生協のネットワークを生かして、被災地の産物を各地で販売しています。

そのような商品を購入した組合員は、震災と被災地の方々に思いを馳せるでしょうし、実際に「東北に行ってみよう」と行動した人もいたはずです。生協は、食べ物をはじめとするくらしに必要な、さまざまな物資で人と人をつなぎながら、相互に助け合う被災地との関係性を上手につくっていると思います。それは、震災前から地域とつながっていた生協だからこそ成しえたことでしょう。

被災地の地域社会の復興とは、人、資源、そして社会関係資本（ソーシャルキャピタル）をいかに取り戻すかです。被災地では、飲食店や理・美容室など、失われた地域資源が仮設店舗としてでき始めていますが、とりわけ「食」の充実はとても重要です。その点においては、地域の食を担う生協は、移動店舗や配達だけでなく、もう少し何かできなかったかなとも思います。

食に関しては、「イン・プレイス（ここで）」が重要になります。脚の悪い高齢

者でも、ショッピングカートを押して行けば、「ここで必ず食べ物を買える」場所があることが大事なのです。民業圧迫の恐れもあるので難しいのかもしれませんが、全国の生協が協力して仮設店舗などの拠点をつくることを、もう一度考えてもよいのではないのでしょうか。また、福島県の放射線などの問題に関しては、全国の仲間と協力して、風評被害を防ぐ取り組みがもう少しあってもよかったですね。

また、今後、仮設住宅から恒久住宅に移り住む人々が増えていきますが、それを見据えて、「くらしのなかで本当に必要なもの」を、地元生協が聞き出して、それを生協全体としてきっちり把握してほしいと思います。

なぜなら、東日本大震災では「<sup>じゆえん</sup>受援力」の問題があるからです。阪神・淡路大震災のときは、被災したのは都市住民ですから、必要か不要かをはっきり口にしました。しかし、地域での助け合いで暮らしてきた東北の方々は外から助けられることに慣れていないため「助けられ下手」です。「もっと受け入れてくれればよいのに」と感じる部分もありますし、逆に本当は必要としていないもので



も「ありがとう」と受け取ってしまうこともあります。だからこそ、行政のアンケートや研究者の調査では見えない部分を、現地の生協が代わりに、ニーズをきちんと吸い上げる必要があるのです。

それに沿って、生協ができることは実行する、できないことは行政や研究者に伝えて手段を考えさせればいいでしょう。集まった情報を整理してまとめることは、日本生協連が果たすべき使命だと考えます。

## 忘れず、近付き、支援の決意を持つ

今回の震災は多くの犠牲と引き換えに、さまざまな人がつながって行動する「協働の大切さ」を私たちに教えてくれました。生協に組織として取り組んでほ

しいことは、他の民間組織と手を結ぶ「民間協働」です。

尊い命が失われた上に、被災地の人たちのくらしの苦労は想像を絶するものです。震災で助かった命を大事に育むためには、安心して暮らせる環境をつくる必要があります。「命とくらし」は、人間が生きるための根本なので

す。道端で「お腹が痛い。助けてください」と苦しんでいる人に、「あなたの宗派はなんですか?」「支持政党は?」と聞く人がいるでしょうか? いませんよね。そう考えれば、それぞれの団体で多少の考え方の違いはあると思いますが、進むべき道が同じであれば、その違いはきつと乗り越えられるはずです。

社会福祉協議会は、命とくらしと地域を大事にしています。多少力点は違うけれど、日本赤十字社や中央共同募金会もそうです。最近では、農協も変わりつつあります。ですから、生協もどんどん横に手を伸ばして、いろんな団体とつながるように頑張ってもらいたいのです。少子化と高齢化が進む日本では、これから「協働する力」をつけなければいけません。実際に島根県松江市や熊本県水俣市では、生協が社会福祉協議会などと

手を結んで、地域で存在感のある活動を繰り広げています。

私たちが今からできることは3つあります。

1つめは、東日本大震災ではさまざまなことが起こりましたが、今なお、困難なくらしを強いられている人たちがいるという現実を「忘れないこと」です。

2つめは「近付くこと」です。そのためには誠実さや情だけでは不十分で、研ぎ澄まされた感性と正しい知識が求められます。被災地がどうなっているのかは信頼できる人に話を聞いたり、たくさん団体のレポートに目を通したり、ときどきは自分で足を運んでつかんでおくべきです。

3つめは、復興支援に対する「決意」です。しかし、人間は楽な方へ流されるので、自分だけでは忘れてしまう決意も揺らぎます。だから仲間や協働が必要なのです。私が忘れそうになったらあなたが言ってくれる、あなたが忘れそうなときは私が頑張る——そういう関係を1つでも多くの組織、1人でも多くの人々と結ぶことが「忘れない力」になるのです。

協働や連帯は先達がつくり出した人間の知恵です。東日本大震災はそのことの大切さを私たちに思い出させてくれました。生協が小さな違いを乗り越えて、いろいろな団体と手をつないでいくことこそ、この震災を未来の糧にするための一歩だと思います。



2013年2月28日

## 記録・生協の「つながる力」2012

WEB 生協・東日本大震災被災地復興支援資料集 連動冊子

発行：日本生活協同組合連合会(会員支援本部)

〒150-8913 東京都渋谷区渋谷3-29-8 コーププラザ

Tel:03-5778-8183(出版部)